

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十二卷 第十号（通卷二六二号）

万象

B A N S Y O

一月号

2024. 1



新年のご挨拶

新年おめでとうございます。

今年「万象」は創刊23年目に入りました。1月号は通巻262号となります。

昨年11月には、4年ぶりに「万象」全国俳句大会を開催することが出来ました。全国各地から参加して下さった皆様の笑顔に触れ、久しぶりに言葉を交わせたことが何より嬉しい事でした。実行委員会を始め、開催に関わった方々のご苦勞に心より感謝申し上げます。

今現在、ロシアのウクライナ侵攻が終わらないばかりか、イスラエル軍によるパレスチナ自治区ガザへの攻勢が続いています。過酷な状況に苦しむ人々を思うと言葉を失います。国家間の軋轢、地球規模の温暖化、AIの実用化等、世界の有り様がめまぐるしく変化しています。

その中であって私たちは、「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」(宮沢賢治「雨ニモ負ケズ」)の姿勢の下、俳句を通して発信できる立場を持っています。全国の仲間と共に、様々な状況に賢く柔軟に対応しながら、俳句との付き合いを深めて行きたいものです。

「気宇壮大に志を高く」、おおらかに楽しく、元気に進んで行きましょう。
今年も宜しくお願い申し上げます。

令和六年一月一日

主宰 江見悦子

令和六年

一月号

万象

BANSYO

新しき年の初めの初春の

今日降る雪のいや重けし吉事よこと

大伴家持（『万葉集』卷二十）

万 象

令和6年1月号

名誉主宰色紙

初景色常陸平野に山ひとつ

内海 良太

4

名誉主宰作品

初 明 り

内海 良太

5

主宰色紙

アネモネはマティスの赤や初暦

江見 悦子

6

主宰作品

能登しぐれ

江見 悦子

7

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

8

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩①⑨ (一月号)

小林 愛子

12

万象の窓②② デトロイトを訪ねて

江見 悦子

13

同人作品

江見悦子 選

14

同人会だより

令和6年を迎えて

曾根 満

34

11月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく④④

江見 悦子

35

同人作品の佳句

江見 悦子

36

令和5年「万象」同人会総会・全国俳句大会報告 明るい光に包まれて

砂地 宏子

38

新春特別作品

木曾の秋

小坂橋泰山

42

同人特別作品

小 春 谷渡 末枝 44
五 湖 の 里 鶴田 勝子 45

特別作品評(十一月号) 岩崎 武士 46

同人作品鑑賞(十一月号) 中本 清 47

「わたしの歳時記 草の露」(『俳句四季』より転載記事) 江見 悦子 48

江見悦子自選句鑑賞④ 寒土用ねぶる秘蔵の蜷酒 福島せいぎ 49

辻立ちの寒行僧の眼に恋す 山本 右近 49

続・風のしをり① 子規俳句の魅力―初期の作品から(一) 沢木欣一 編 集 部 50

万葉の抒情⑩ 『万葉集』にたずねる抒情の源流⑩ 橋本 清 51

万象ノオト「万年筆」 大長 文昭・小坂橋泰山・広瀬 俊雄 52

巻頭作家(12月号)プロフィール 谷 廣司(札幌) 新出 祐子・山本カツ子・馬場美智子 54

松原智津子

万象作品

江見悦子・内海良太 共選 55

万象作品の佳句 内海 良太 66

新中央句会報(10月例会) 68

北から南から めだかの学校(埼玉) 三村 紀子 72

ルビーの小函(一月号) 編集部・校正担当 73

東西南北 74

初景色

常陸平野に

山むとつ

良大



『常陸風土記』によると常陸

国は「土壌沃墳ひ 原野肥衍
たり」(つちうるい、はらこえ
たり)と、多くの郡を擁する
豊かな大国であった。

今の時代でも常陸の平野に、
どかんと坐る筑波山は豊穰を
もたらす神の山である。



初明り

内海良太

(名誉主宰)

安房上総下総並べて初明り
しほさゐの届く生垣淑氣満つ
水車より陶土搗く音初雀
菱紅葉沼に干満ありにけり
落鮎のちひさな息を手の平に
蘆刈の下見バイクで来てゐたり
膝掛に夜汽車の記憶みかん剥く

アネモネは

マティスの赤や

初暦

悦子



新しいカレンダーには心弾む。

ある年、一枚めくった一月にあったのが『紫色のローブとアネモネ』と題されたマティスの絵。

長椅子に座り頬杖をついた女性の前には、花瓶にあふれるアネモネ。その中の赤色が、いかにも「色彩の魔術師」と謳われたマティスの赤だった。「初暦」という季語がすっと出た。

能登しぐれ

江見悦子

(主宰)



鴉来るオリブの実のぶだう色
玻璃越しの白鳳仏や秋の雷
三角の貌をぐるりといぼむしり
くろまめは丹波よ土と日の匂ひ
茶の花や足どりゆるき夫を待ち
計報次ぐ秋明菊の風の庭
能登しぐれ地のつやつやと純子句碑

中山純子先生の句碑を訪ねて（牡丹地にひらき信心を明るくす）

露

小林 愛子

(名譽顧問)

猪に栗わけても丹波月見豆
くろまめの莢の産毛も丹波なる
裏窓に草のおどろや秋ついで
犬の目のきらりと碧し露の中
郁子熟るる母の記憶に胭脂色
坂の上豆名月ののぼるなり
身を入れてみたきよ今日の櫛紅葉

神の留守

中村 千久

(編集人)

どびろくの一句を記す箸袋
顎長き禰宜の欠伸や神の留守
十月や遥けき声に耳澄ます
眩けばさらにゆかしき十三夜
小春日のなかなか詰まぬ詰将棋
初霜の白のまぶしき濁世かな

望の月

福島 せいぎ

(顧問)

この星の穢土を照せり望の月
仏壇に供へて匂ふラ・フランス
よく笑ふ大工が秋の大屋根に
鍍金仏磨きあげたり月に坐す
いほむしりお大師さまの笠の上
妻留守の毛布どこかへしまひたる

故郷

柳澤 宗正

(顧問)

古熊手山と積まれて一の西
あかあかと生家の垣の一位の実
故郷の葡萄引つ提げ友来る
利酒や信濃の地酒五種並べ
卒寿越え猫背の兄や大根引く
黄落やへボン施療所跡の寺

どんど

曽根 満

(同人会会長)

峰越しの初日浴びたる小学校
鰹木に鳩の低音淑気かな
凍蝶や箒の先に起さるる
寒柝を打ち込まれたり单身寮
寒に入る谷や獣の声しきり
大富士の膝下どんどの火を放つ

子規庵二句

松原智津子

(北海道)

遠く来て萩に日当る子規の庭
糸瓜棚子規の絶句を胸の内
魯山人の織部間近に文化の日
暮れてなほ緋を失はぬ紅葉かな
花時計針外されて冬に入る

菊

膾

亀田やす子

(栃木)

母の忌の四半世紀や菊膾
日の中に首をもたぐる秋の蛇
御霊屋の塀の隙よりつづれさせ
草虱裾にびつしり三千歩
友逝きて今日の時雨となりにけり

秋澄めり

沢辺たけし

(千葉)

楷の実や声の洩れくる論語塾
水音の流れに沿うて穴惑ひ
秋の虹スタンプだけの子の便り
金色のイコンの聖母秋澄めり
佐倉医のこころ受け継ぎ柿たわわ

*佐倉医……佐倉藩医師

橡落葉

吉中愛子

(東京)

突き刺さる木犀の香の頭上より
栗名月どの坂からも真正面
手で搔いて箒で搔いて橡落葉
潜り戸に外鍵三つ柿盛ん
初鴨やヴィオロンの音に逆立ちて

小

春

榎本文代

(神奈川)

鯔跳ねてオルガン低くひびきくる
香りなく金木犀の終りけり
駅前のカフェの明かりに秋惜しむ
朝の客越前蟹と土鍋提げ
鳩のゐる方へ歩める小春かな

四姉妹

神田美穂子

(静岡)

直ぐなるも風になびくも秋の草
新米や呉須の唐子の飯茶碗
揺れて着く一輛電車雪迎へ
灯下親しちりぢりに住む四姉妹
草雲雀茶畑越しの通ひ風

一葉忌

井村和子

(石川)

子別れの鳥の声か松の末
峠茶屋てんこ盛りなる零余子飯
哲学の道を行き行く皮衣
白鳥句碑生れし日偲ぶ今朝の冬
針山の待針揃へ一葉忌

新潟県諫波湖に欣一句碑

月の舟

前田貴美子

(沖縄)

草の花摘んでくれしは隣の子
吾^あを生みし母の哀しみ水の秋
雨冷の薄暮注げり白ワイン
南溟の記憶の旅の月の舟
辺戸遠く風透くところ欣一忌

風音散歩 ① (二月号) 小林愛子

揺れて着く一輛電車雪迎へ 神田美穂子

「雪迎へ」は、歳時記によると、「晩秋の穏やかな日に、上昇気流に乗って空高く伸びた多くの蜘蛛糸にぶら下がった子蜘蛛が、空中に漂う現象。雪の降る時候になるところから雪迎えとよんだ」とある。蜘蛛の糸だけが飛んでいるのは、「遊糸」と言い副季語。問題は遊糸が「陽炎」の副季語でもあることだ。「古くは『かぎろひ』と言い、ちらちら揺れながら光るものすべてに言ったようで、水蒸気、曙光、蜉蝣、薄羽の昆虫、糸の先の子蜘蛛が気流に乗って空中を移動するゴサマー（雪迎え）の現象にも言った。」（山本健吉「基本季語五〇〇」講談社学術文庫）この曖昧さは豊かさでもある。「揺れて着く」一輛車は長く地元民に愛されたのであろう、その上を飛ぶ子蜘蛛をイメージするのは童話の世界だ。

栗名月どの坂からも真正面 吉中愛子

「栗名月」は「後の月」の副季語で陰暦9月13日の夜、またはその夜の月をいう。先月の十五夜の華やかさはなく、栗や豆を供えて、その秋最後の名残の月ともいう。ここは坂が多く、「どの坂からも真正面」に月が望める。真正面と言われてハツとする、月はどこから見ても正面なのである。

辺戸遠く風透くところ欣一忌 前田貴美子

澤木欣一の忌日は11月5日、平成13年に死去された。句集に「沖繩吟遊集」があり、これを記念して句碑を建立し、昭和55年8月4日、辺戸岬に句碑除幕式が挙行された。〈夕月夜乙女の齒の波寄する 欣一〉。辺戸岬は本島の北端に当たり「辺戸遠く風透くところ」なのである。作者は目を細めつつ師を偲んだ、睫毛をくすぐる微風を感じながら。

水音の流れに沿うて穴惑ひ 沢辺たけし

冬眠のため、蛇が穴に入るのは秋の彼岸頃からといわれているが、実際にはもっと遅い。歳時記に「数匹から数十匹がどこからともなく集まり一つ穴に入り、からみあつて冬を越す」とある。彼岸すぎても穴に入らないのが「穴惑ひ」。

「水音の流れに沿うて」いるのは穴惑い、稚い蛇か、長老の蛇なのか、秋も終わりの澄んだ空気があたりを支配する。

遠く来て萩に日当る子規の庭 松原智津子

誰でも一度は訪ねたいと思う根岸の子規庵である。作者は北海道からであれば「遠く来て」の言葉に実感がこもる。はるばる懐かしいものを訪ねるような期待と、もどかしさと。調べの高い、子規庵への挨拶句のようなひびきがある。

細見綾子に「今日は家の萩が咲いたので、それを見ていて法隆寺の子規忌のことを思い出した」に始まる随筆「私の歳時記」（「子規忌」）がある。ここも萩と子規である。

デトロイトを訪ねて

江 見 悦 子

昨年5月、デトロイトに行く機会がありました。学会の招待に応じた、米寿の夫の「終活」に付き合った旅でした。ミシガン州にあるデトロイトは、カナダとの国境にあり、20世紀始めヘンリー・フォードが「T型フォード」をヒットさせて以来、自動車産業と共に生きて来た街です。

現在は人口の8割を占めるアフリカ系アメリカ人（職を求めて南部からやって来た人々の子孫）の多くがダウンタウンに住み、白人は郊外に居住しています。

空港から着いた街の中心部は、周回道路を車が猛スピードで走り、歩行者はデトロイト川沿いの遊歩道や公園内にちらほら。広場には労働者を讃えるモニュメントが目立ち、ここが労働者の街であることを実感しました。再開発地区「ルネサンス・センター」にはゼネラルモーターズ（GM）の本社、73階建てのホテルと、超高層ビルが林立。ホテルは電子化されてペーパーレス、スマホがないと色々な用が足りません。ようやく街の地図を手に入れ、憧れていたデトロイト美術館へと足を伸ばしました。

市は一時期、人種問題、大量解雇、人口流出等の課題が解決せず市況はどん底、治安の悪さは全米一という不名誉な事態を招くに至りました。2013年には、何と負債総額180億ドル（1兆8000億円）を抱えて財政破綻します。

全米で3本の指に入るデトロイト美術館の作品を売却する案が出る中、市民の連帯によって手放さずにすんだという実話をもとに、原田マハが小説「デトロイト美術館の奇跡」を書いていきます。小説の核となったポール・セザンヌの絵画「画家の夫人」と、ゆっくり対面することが出来ました。

昨春秋、デトロイトに本部を持つ全米自動車労組（UAW）は、90日間のストライキを打って、大幅賃上げを勝ち取りました。日々の新聞報道を追いつながら、そのパワーと粘り強さに驚き、アメリカの一都市の持つ底力と、変化に対応しながら生き抜くフロンティア精神に脱帽した次第です。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本敬子

爽籟や土偶をさなき丸き貌
藻岩嶺も手稲山も昏る実むらさき
足るを知る小さな暮し秋ふかむ
爽やかに銀どろ葉裏さやぎけり
○空の色写し取つたる雪ぼたる

札幌 林陽子

銀竜草小暗き櫛の地を這へり
ラムネ飲む百一歳の嬰鑠と
○括りても思ふがままに萩の風
鮭の川堰に手負ひの骸かな
蝦夷の地に枝撓ませて柿百個
するすると藻岩山に高き望の月

札幌 落合裕子

野ぶだうの色増す小径湖の晴
えぞ鹿の草食む道を夫の墓へ
砂浜に玫瑰の実の夕日色
ほぐれゆく蒲の穂絮の白さかな
対岸は紫烟る蘆の花

札幌 濱谷和代

さやけしや灯明絶えぬ女身仏
海見ゆる寺の石垣こぼれ萩
落日や尾花の黒き影揺るる
葉隠れの高みの枝に小鳥来る
秋薔薇白極め白けがれなし

札幌 大内和憲

○野菊濃しアイヌ古道とおほしきに
風ぐせのまま雪を乗せ枯すすき
てのひらに綿虫とらへ往診す
冷やかやインプラントの軋む音
一番機枯野の黙を破りをり

札幌 紅露恵子

夕月夜切子硝子へ白き花
さはさはと波寄せ白き秋の蝶
鳥渡る石狩湾の青深し
さやけしや蝦夷栗鼠を追ふ松林
食卓へ箸置き二つ小鳥来る

札幌 大内マキ子

濃きうすき雲のうつろひ雁渡し

荒荒と草の刈られて無人駅
廃屋の窓覗き見に花芒
荒磯や旅に雑魚寝の新酒酌む
海原の煌煌として小浜菊

札幌 中鉢弘一

潮騒を遠くに句碑の並ぶ秋
初鴨の尻逆立てて川藻食む
森深く枯葉の湿り地の湿り
幾筋も楡に絡る蔦紅葉
二つ三つ続けて頬に雪婆

札幌 北浦詩子

雲群るる間を照せり望の月
電線のたわむ道端秋の暮
身に入むや見舞帰りのにはか雨
山の端を淡く彩る秋の虹
日面の银杏黄葉の眩しさよ

江別 佐藤哲

大ポプラ葉裏の白し秋に入る
○熊打ちと長湯をしたり無月なる
秋たくる道行く馬車の鈴の音

木の実降る茅葺き屋根の教会に
川毎の鼓動となりて鮭のぼる

江別 太田 佳美

山柿に手の届きさうローカル線
二色だんご不揃ひなれど良夜かな
秋薔薇の白き一輪友逝きし
地方紙の廃刊決りそぞろ寒
蜂の子を大鍋で炒る祖母なりき

新潟 高橋 ひろ

小扇を揚げしほどの秋夕焼
卷雲は雨の知らせや葛の花
橋裏の暗き湾曲秋の風
秋の蝶日向の花へ又戻る
半回転して出航す秋風裡

新潟 高野 松風

新涼の越後線より友来る
名月やもう一盞の六地藏
石橋の六連アーチ秋のこゑ
月代や家並染めたる夕まぐれ
葡萄売りに在るなまりのなつかしき

南魚沼 森山 暁湖

妻癒えて秋刀魚の煙につつまるる
乱雑といへば諸掘終へし畑
霧深し夜通し灯す高架駅
朝護摩の鉦の早打ち小鳥来る
○樗老い泰然として時雨受く

益子 光岡 れい子

朝の日を織り込むやうに芒ゆれ
月今宵すいすい進む刺子針
暮れぎはの十月桜紅ほのと
辛夷の実拳の形に落ちにけり
柿たわわ火入れ間近の登り窯

芳賀 大村 かし子

○洗濯の竿使ひ切る鴉日和
大粒の毬に納る利平栗
はらからと三年ぶりの走り蕎麦
長髪を一気に切りて秋惜しむ
秋気澄む雲一つなき加波山筑波山
嘶きに釣られて蚯蚓鳴きにけり

宇都宮 阿久津 勝利

茶柱立つ九谷の湯呑み秋の宿
赤のまま駄菓子屋前の丸ポスト
長き夜や貨物列車の踏切音
犬小屋の猫飯つつく稲雀

飯木 上岡 佳子

いとこ会栗の御強の炊き上る

晴れ渡る日光連山稲の波

○秋うらら蔵の獅子口大欠伸

曼珠沙華の畦大股にこふのとり

七半のバックミラーに鬼やんま

佐野 増田 幸子

赤松の亀甲浮ける秋風裡

野分あと鴉の歩く引込み線

式部の実食べ尽さむと嘴光る

虫の声か細くなりぬ闇重ね

起き抜けに庭を巡るも寒露かな

佐野 加藤 季代

金木犀闇深まればより匂ふ

雁渡し夕日あたる木当らぬ木

土を被^ひて命育む木の実かな

色鳥や日の温もりの花鋏
男体の少し光りて秋澄めり

佐野 阿部 澄

掌に受くる蝗の息づかひ

吹かれ来たとべぬ秋蝶縄手道

靴先に飛蝗の跳ぬる産湯の井

狛犬の足に縋るや鬼の捨子

○数独の難なく解けてむかご飯

佐野 芝宮留美子

薔薇園のひと隅青き秋の薔薇

抜きをれば種落つる音鶏頭花

朝日子に玫瑰の実の朱の照り

なだれ咲くコバルトセージ露とどむ

音消ゆる真夜中の雨秋深し

佐野 島田 和枝

秋の日をきらり返して雑魚の群

○三龜嶺の三角点に立てば秋

頑丈な稲架組まれたる棚田かな

城跡や躑躅の古い木返り咲く

野葡萄の濃き斑点の光りあふ

佐野 売 野

緑

庭師まづ風船蔓絡め取り
閑かさや萩の風吹く円仁像
こすもすや桐の俎板漂白す
動かざる山霧に射す朝日かな
稲架掛けの姉さん被りちらちらと

佐野 店 網 洋 子

雲白し水面に映る初紅葉
浮雲や中島の萩揺れはじめ
うつすらと男体山白し檀の実
蕎麦の花ネットで囲ふ峡の村
秋の蚊の脛にとまれる気配かな

足利 大 木 茂

色変へぬ松の島島崖白し
アプト式軌道花野となりにけり
毒あると思へぬ紅の茸かな
京へ向く壺の碑初紅葉
松手入れ濠に迫り出す吊り足場

土浦 澤 照 枝

萱原を釣人の来る竿立てて

音もなく雨降る一日茸山
落花生ほつちの高く組み上る
奥宮に陽の届かざる秋の杜
浜菊や砂丘狭まる鹿島灘
加須 茂 木 弘 子

一望の芦野の里や豊の秋
遊行柳野菊の道の真つ直ぐに
夕映えや一族分の稲ほつち
沢音や林抜け来る秋の風
鴨来る光る細波遡り

さいま 山 本 右 近

風が乗せ風が見捨てし草の絮
つくばひへ飛石つづき柚子匂ふ
席を立つ眼差しの美し月の茶事
色硝子灯る教会蔦かづら
ひたすらに闇押し上ぐる虫の声

所沢 三 好 か ほ る

秋の雨南大門に雨やどり
朴の実の弾けて赤し枳殻邸
蓮の実とぶ四阿に居る車椅子

芭蕉布や秋の火影のやはらかに
旅三日庭にま白き曼珠沙華

所沢 南 雲 秀 子

玄関に秋の蚊わつと寄り来り
銀杏の実拾うて帰る夕まぐれ
はてしなく続く青空布団干す
沿道に茶の花続く入間かな
山あひの道彩れる秋海棠

千葉 田 中 道 江

ロボットが運ぶランチや秋時雨
色戻る復興の町秋茜
竹春や縁切寺に風わたる
女王墓へ石段高し秋桜
秋草にまとひつきたるしじみ蝶

千葉 松 浦 陵 保

社へと蔓伸ばしたる葛の花
横手城蛇の崎橋の水澄めり
鐘の音や金華山への落葉道
亡き父母の墓標近くや木の実降る
進路北ウクライナへと星流る

千 葉 喜 多 恭 仁 子
四階の病棟包む秋夕焼

看護婦の小走りの音夜長し
深呼吸退院の日の空高し
木犀の香や退院の車降り
長く長く真横になびく秋の雲

千葉 大 月 玲 子

曼珠沙華田んぼ四角に刈り取られ
友見舞ふ釣瓶落しの光芒に
月と日のあはひに烏瓜の花
物影を出で秋蝶の落ちつかず
出雲路や石州瓦映ゆる秋

酒々井 竹 澤 竹 里

土器や的を狙ひて紅葉谷
へばり付く塔のへつりの照紅葉
ちらと見る見返り阿弥陀紅葉狩
親芋にぶら下りたる子芋かな
大空に銀翼拡ぐ群れ蜻蛉

佐 倉 内 海 保 子

祭髪のをんな三人神谷バー

人形焼上野に買うて十三夜
虫時雨古歳時記を繕へり

○金色の縁の小鉢の菊脣
無花果の砂糖煮二つ益子皿

佐介 大内佐奈枝

柿の色ほめて庭から入りたり
栗を剥く夫婦黙して背をまるめ

○冬瓜をほいと放られたたら踏む
稽田に鷺の抜き足忍び足
草の絮迷ひ込んだる兎小屋

佐介 三屋英俊

聞き返し聞き返されて夜長し
鈴虫に暫し枕草子伏せ
夢に来て花園の父笑むばかり
新薬の皿に赤飯地の神に
行く秋や友描きかけの絵を残し

佐介 横川良子

○朝霧や沼の際まで干拓田
雨音とテネシーワルツ聴く夜長
秋深むアスファルト搔く竹箒

学校のチャイムきれぎれ野路の秋
這ひ回り解けぬほどに真葛原

四街道 奥 太 雅

赤松の林抜け来る風さやか
柵越えて小振りとなりぬ牽牛花
掘上ぐるオクラの株に終の花
軽やかなボレーの響き秋日和
稽の穂膝の高さに頭垂れ

四街道 塗木 翠 雲

行く秋の雨垂れを聴く浮御堂
櫟の実足裏のつぼ押しにけり
山茶花の蕾膨るる耕堂忌
石堀に鶏頭の影やはらかし
田仕舞の煙立ちたり印旛郡

船橋 山下 良 江

木洩れ日の林を染むる曼珠沙華
鮮やかなみどりの椎の実拾ひたり
凭れつつまた起き上がる曼珠沙華
青どんぐり掌に握りしめ戻りけり
曼珠沙華丘一面を染めつくす

船橋 大山 春江

○捨畑は狗尾草の風ばかり
空つばの厩舎並ぶや蓼の花
目鼻なき案山子に峡の風やさし
落雷跡のこる神木蔦紅葉
ひそやかに山路にひらく野紺菊

船橋 赤堀 洋子

納め来し永代墓へ今日の月
野馬土手をどんぐり蹴つて走りけり
実紫零れて路地の売り物件
まつさらな空に早早栗名月
鈴生りの柿の一つに嘴の跡

船橋 久保村 淑子

秋空を煙のやうに雲流る
校庭に水筒並ぶ体育祭
○蜥蜴曳き蜂曳きて蟻穴に入る
秋風によろめいてゐる蜥蜴の子
利根川を渡る墓参の空青し

船橋 片桐 帆一

浅間路の小さきほむらや草紅葉

秋時雨小諸古城の低き門
残菊に追分哀し節回し
氷頭膾好みし父の背のまるき
ポケットに子供の音や胡桃二個

船橋 中嶋 久登

明王の背の火焰か曼珠沙華
月代や罽綱解くクルーズ船
松手入れ終る庭園抹茶濃し
団栗の風の遊び場踏みて行く
少し揺れ風の離さぬ秋桜

柏 山本 とく 江

群れゐても風それぞれに曼珠沙華
生家絶ゆ垣根に甘き一位の実
ひさびさの白鳳仏や走り蕎麦
秋薔薇の一片一花の色澄めり
鬼の子の吹かるる一茶文学碑

柏 内田 郁代

○櫨の実の檻樓のごとくに吹かれをり
百年の孤独てふ酒牧水忌
赤のまま二駅五分の一輛車

秋冷の宮に神馬の身じろがず
聖堂の前に茶の花ふつくらと

柏 古川 京子

安房さやか伊八の波に音のして
遠き日の川のにほひや紅葉鮎
肉投げ入れ三万食の芋を煮る
満月や肩に重たき硫黄泉
夕空に梢のとけゆく酔芙蓉

流山 穂 莉 照子

爽やかや羊齒打つ水のこだまして
すだ椎の幹の振れや秋深む
抽でて風呼ぶ一花秋桜
切れ切れに風の追伸萩の花
身に沁むや剝製はみな人見つめ

東京 名 和 政 代

市ヶ谷は学生の街いわし雲
神苑のぬた場の鹿の探り足
白粉花日柄の帯を貸し出せり
時代祭青の脚絆の奴さん
つややかな業平椿実のあらは

東京 藤 田 裕子

足場解く槌音空へ鰯雲
見舞客送る門辺や望の月
木犀に寝ね木犀にめざめけり
古家に夫婦ふたりよ地虫鳴く
寝返りの背にかけやる羽根蒲団

東京 島 野 ひさ

開け放つ書庫の隅より昼の虫
水引草朝の雫のきらきらと
菩提寺の屋根より昇る月今宵
今年米抱え無沙汰の子の帰宅
相続の話も少し秋彼岸

東京 加 賀 葉子

枝の下大きな網張り松手入れ
弓張月犬の一声遠くより
台所も指も香るやもつてのほか
ゆびさきのワセリンを買ふ冬隣
秋の電車左右の人も読書かな

東京 久留 島 規子

むらさきの四方に乱れて式部の実

○切株に浄めの塩と今年米
コスモスにだいたい色の主張あり
秋祭テントに運ぶ餡の艶
恙なき一日の暮れて栗ごはん

東京 下 嶽 孝 一

かなかなの声にふくらむ森の闇
廃線の鉄路うづむる花野かな
○手も足もひとに遅れて踊の輪
名月や窓辺に寄する車椅子
下校児の路をせばむる石榴の実

東京 杉 浦 一 子

朝からの澄みし青空秋一日
校庭に声の飛び交ふ運動会
応援の大声ひびく天高し
運動会子猫を抱いて子の帰る
とんぼ去り校庭ひとと夕暮るる

東京 草 間 三 香 子

○棟梁の一声つるべ落しかな
釣人の寝転ぶ土手や草紅葉
神鶏のたつた一羽や菊日和

露草や水の匂ひに立ち上がる
焚付けのすんば拾ひや冬支度

東京 岡 村 純 子
※すんば……杉の葉のこと

露草の葉陰に色を深めをり
秋の蝶庭に来りと母の声
盤跡の残る野仏秋深し
拝殿の御簾を色なき風よぎる
野仏の並ぶ小径や曼珠沙華

東京 桑 原 優 美 子

前歩く人追ひ抜かず草の花
病状を尋ねあぐねて秋更くる
製材の匂ふ木屑や秋の雨
水底に影の縋るる破蓮
合格がひとつだけ来て小六月

東京 三 村 紀 子

道行けば犬に好かるる菊日和
かわいいに振り向く犬や秋桜
赤らめる白山茶花の蕾かな
秋の空拍手促す軽業師
秋の暮首輪光らせ犬のゆく

東京 小池 清 晴

○砲丸の描く半円天高し
蟪蛄へおぼおづ伸ぶる子どもの手
秋の夜洗濯板のごとき空
ひしやげても開く朝顔雨の中
ごつごつの枝から槇櫓ごつごつと

武蔵野 砂地 宏子

枯れてなほ風にじやれつくゑのこ草
かさこそと障子に來り赤とんぼ
床上げの朝をかをる金木犀
秋雨の墓苑暮れゆくばかりなる
積み上げし枝の香りや松手入れ

昭島 正田 華子

熱熱のコロッケ甘し秋うらら
独り居の燈火親しく辞書を繰る
小鳥來る遺愛のクルス赤珊瑚
喧嘩したことも懷し秋桜
晩秋や座敷箒を吊し売る

町田 広瀬 俊雄

丹波路の畦に赤赤彼岸花

くろまめはあと五日待て農夫言ふ
尋ねたる綾子の生家柿たわわ
掛軸はでで虫の句や秋の暮
山深き丹波の里の栗光る

町田 桔梗 純

白寿なほ艶ある声よ秋彼岸
昆布巻は越後の土産小鳥來る
虫時雨タクシーを待つ人の黙
訪ふ人のなきまま昏れて栗の飯
木犀を賞めて主と立ち話

日野 喜多尾 明子

倒木をくぐりて速し秋の水
これここは水戸公の田ぞ稲雀
きちきちの跳び立つて草ゆれ残る
膝に本ことりと落ちて夜長なる
待宵の月影に人送りけり

横浜 西本 才子

沖合の山並ひくく鳥渡る
秋麗や大きく曲るモノレール
地下街にジャズの演奏秋灯

鰯跳んで平潟湾の暮れにけり
ベイブリッジ潜れる船と帰燕かな

横浜 大橋 雅子

反り橋の丹の影乱す通し鴨
湧水の底の小銭やきりり秋
酒蔵の並ぶ故郷秋麗
電柱の烏の声や秋気澄む
葉の散りて電飾のやう残る柿

横浜 山崎 郁子

赤白の帽子並びて甘藷掘る
甘藷手に家路を急ぐ童かな
紅のいと小さかり秋の薔薇
高塀を好みて落つる栗の毬
青木湖より水引く田圃稲実る

横浜 小坂橋 泰山

闇の中音たててゐる落し水
ひと房の両手に重みマスカット
幼子もリユック背負ひたる茸狩
みづうみといふ秋天の水鏡
新蕎麦や蒔蓐語る老ふたり

横浜 三木 豊子

秋しぐれ髯を濡して猫通る
足元の笑栗蹴つて拾ひけり
白萩のなだれを括る寺男
芋の露少しの風にこぼれたり
台風過庭に散らばる葉の青き

川崎 新妻 奎子

運番の子の帰り待つ火恋し
すり寄りて餌を欲る猫や後の月
仏壇の白桃夜を香しく
お十夜の案内故郷の寺遠く
分け入りて身の火照りくる紅葉山

川崎 大久保 進

竹春の雨の小道の嵯峨野かな
地虫鳴く寝息の妻に風少し
抜け道のあとは道なり秋の風
見返りの札に黙礼星月夜
○秋扇閉ぢて背搔く留守居かな

鎌倉 恒川 清爾

○月涼し鎌倉山にけもの道

売家と色褪せし旗吾亦紅
びしよ濡れの水子地藏やそぞろ寒
初もみぢ山門に聞くオルゴール
寺町にバッハのアリア秋深む

横須賀 織田みさゑ

まかり出て風に鎌上ぐ大蠮螋
枯れきつて風に鎌上ぐ子蠮螋
飄々と生きて八十路や石落の花
晴れ続く十月友を送りけり
深秋の別れは悲し今年又

伊勢原 佐藤和子

もつれつつ川の向かうへ秋の蝶
○診断書はポシエットの中そぞろ寒
庭に来る蝶みな小さき素秋かな
柿一つとりて逃げゆく小猿かな
田沢湖の底まで澄みて秋の声

静岡 大村峰子

軒下は物吊るところ唐辛子
沢塞ぐ砂利の中より富士薊
木犀の金ほろほろ村の路地

野路菊を一本朝の食卓へ
実紫一粒づつの日を弾く

静岡 海野みち子

廃校の尊徳像へ小鳥来る
四五本のコスモス揺るる夫の墓
蔓引くや跡に南瓜の転れる
間引菜の胡麻味噌和へを喜ばる
飛石に紫式部実をこぼす

静岡 宮崎知恵美

花芒の波打つ峠越えて来し
木瓜の実の青青実り傷多し
参道に走り根あらはちちろ鳴く
秋の蚊の耳にはりつく翅音かな
○夫の手も出て山栗を剥きにけり

静岡 岩崎武士

森奥に啄木鳥の音薪を積む
風待ちや刺羽の夜の伊良湖岬
野仏に野の花手向け下校の子
兜虫の墓を据ゑたる子らの基地
女教師の韋駄天に沸く運動会

静岡 望月 敏男

耳奥に波音のある厄日かな
片頬を焼かれて歩く街残暑
秋風鈴止り一人となりにけり
小鳥来るピノキオ踊る時計台
震災忌盲導犬の立ち上がる

静岡 藤原千代子

車椅子白粉花に来て止る
四つん這ひの庭師あらはる松手入れ
ふるさとや山辺川辺に曼珠沙華
思ひ出したかに鳴き出せり秋の蟬
こほろぎの鳴くやそろそろ厨事

静岡 荻野加壽子

図書館の黙に畳めり秋扇
この先は一本道や曼珠沙華
桐箱に手彫りのおもて月今宵
マイ箸は根来の朱塗走り蕎麦
中也忌や海に月光降りやまぬ

静岡 小川 明美

二の丸を走る索道秋あかね

静岡 藤本 節子

訪ひの声に蜻蛉向きを変へ
稲つるび布袋の臍の金剥れ
コスモスの君の胸越す高さかな
時の鐘色無き風に乘りにけり
風待つや生糸めきたる芒の穂
水底に陶の欠片や鰯雲
落人の里の十戸や鷹渡る
紫蘇の実や本家分家の隔てなく
鵲鳴くや黒雲迫る礼拝堂

静岡 大長 文昭

米作り今年かざりと稲架を組む
大花野一気に溪へなだれたり
父の忌を一日過ぐるや大根蒔く
休み田の桜蓼より猫の貌
○栗の飯一升炊きて妹逝けり

静岡 加山 ひさ子

伝言板失せたる駅や秋夕焼
大空に直ぐなる杉や涼新た
菊人形十日過ぎたる胸の傷

新蕎麦を啜りつつ酒酌みにけり
祖父の字の残る重箱律の風

静岡 吉野美智子

厨事終りて見上ぐ冬の月
転た寝の湯舟にきこゆ虫の声
をみなへし家の中よりパン焼く香
秋の夜子犬の声を遠く聞く
うすもみぢの枝を渡りて群雀

静岡 石川裕子

○秋暑しをちこちに鳴る電子音
声響く金木犀の通学路
礼状に礼状を書く虫時雨
松手入れ父の遺愛の盆栽も
救急車待つ間の長し昼の虫

静岡 本多ひとみ

米蔵の白壁の罅秋暑し
藪枯らし空き家の屋根を伸びに伸ぶ
新涼や読経の響く山の寺
翻る螢光色の鳥威し
灰白き薄雲纏ふ今日の月

静岡 杉澤

修

登高の眼下に青き風の海
つくばひに紅ひとひらや秋海棠
人丸の木像祀る月の寺
色鳥の影俠客の眠る石
さはさはと山動せり竹の春

射水 成瀬真紀子

○日本海の風を握りて稲を刈る
掛稲の艶美しき能登路かな
満月の光重たし葬の家
猫の目に月の色ある良夜かな
丘陵の雲へと続く蕎麦の花
戸すれすれ百輪咲きの菊運ぶ

金沢 中條睦子

空はもう暗き水面に黄落す
草の花川一筋が国境
○暮の秋我を放れず杖の音
冷やかに能登桧葉の床艶めけり
窓開けて金木犀の風もらふ

金沢 今越みち子

しじみ蝶に薔薇の好みのありにけり
長方形の売地びつしり猫じやらし
金色に光る小菊や尊徳忌
月影に金の旅客機過りけり
ぐづぐつと煮立つスープやそぞろ寒

金沢 伊藤美音子

水の香の夏大根の辛さかな
傘をさすほどもなき雨韭の花
夫の歩に合す日暮や法師蟬
○奥つ城にまだ出揃はぬ曼珠沙華

金沢 高田たみ子

独り居の夕餉は早し栗の飯
山の水竹樋で引いて新豆腐
川へ向き列なす雨の曼珠沙華
長き夜やもやしの髭を切ることも
がらんだうの校舎残りて秋の風

金沢 豊田高子

満潮の波が照り合ふ鯨の秋

唐辛子かつと日の照る決戦地
木偶抱いて出を待つ黒子文化の日
音もなく初鴨攫ふ鳶かな
木洩れ日へ手を差し入れて葡萄狩

金沢 松井佐枝子

空き地増え風集り来猫じやらし
湯気の立つ小さき蒸籠栗おこは
身に入むや鯛の鱗の飛び散れる
蹲踞を束子で磨く水の秋
さやけしや電子音して返事して

石川 石川純子

天仰ぐモーゼの巨像星流る
女郎花すがれしままに風の中
若衆の赤きたすきや秋祭
鑿跡の光る彫刻文化の日
山の風さわさわ揺らす蕎麦の花

金沢 河野尚子

月のぼるおわらの果てし静けさに
蛙毎にほむら散して彼岸花
○子の爪立ち親の爪立ち林檎狩

まだ透くる斧振りかざし子蟪蛄
蝦蟇摺みシャッターを切る漢かな

金沢 道場 啓子

忙しなく小鳥出這入り沢胡桃
起きぬけの目にひと群の帰燕かな
良夜なり生れし子の名涼花とふ
新涼の風みどりごの眉うごき
髪かき上げ指折る句作秋暑し

内灘 塩井 志津

鮮やかや初唐辛子朝市に
瑞兆のごと葉隠れに榎櫃の実
稲妻や越の白嶺は雲隠れ
もつこすてふ早生の蜜柑の酸味がち

○帰郷子の肩で風切る在祭

七尾 谷 渡末 枝

色鳥来汐汲桶の乾きをり
一組の客待つ新米炊き上げて
秋収め板戸に記す藁の数
照り返す湖や白鳥渡り来る
露けしや繰り返し聴く「涙そうそう」

敦賀 倉谷 紫龍

つくつくしふいごの壁の火伏札
瓜坊のライトに慌て峡の闇
太閤の茶釜に沸し秋暮るる
道祖神並ぶ安曇野霧深し
朝露や杉葉背負ひて山下る

敦賀 倉谷 ます美

すいつちよの鳴くは宮門閉す頃
糸瓜忌や洋梨の皮うすく剝く
刻み菜は母の思ひ出唐辛子
お茶漬は婆の奈良漬秋暑し
小舟消ゆ近江舞子は霧の中

敦賀 鶴田 勝子

馬追や陣屋の昏き竈あと
こぼれじと朝日を玉に芋の露
潮の香や月をかかぐる磯馴松
寺町の墓地に綵立ち彼岸花
老猫のぬくみを膝に居待月

敦賀 中川 雅月

葉月潮川瀬を潮の上り来る
○古民家の梁に十把の唐辛子

馬追の姿隠るる古竈

向ひ家の庭の日溜り桔梗濃し
伊賀越えの鈴鹿関や露時雨

敦賀 中村

優

松笠の模様に炙る若狭ぐじ
肌荒るる岩根の松の新松子
馬追のあと追ひ父祖の荒田かな
硯手に筆を選ぶや瀬祭忌
パノラマを揺れて零るる芋の露

大阪 入山 繁

幸

ランニング遠回りする萩の道
金色の穂波の芒より男
介護士と歩くりハビリ菊日和
今朝搗きし新米送るとの電話
街路樹の一本銀杏たわわなり

徳島 福島 吉美

秋暑し客間に響く鳩時計
忌を修す僧にほんのり天花粉
溝萩や村を見守る野良時計
佃煮の庫裡より匂ふ秋彼岸
参道の零余子買ひ占め旅終る

徳島 村上 和義

尊徳像消えし校門草の花
もてなしは善根宿の栗の飯
外湯まで庭下駄鳴し秋の宿
鳶の笛響く海峡秋日和
崖に立つ小便小僧秋高し

徳島 宮西 修一

川の字の真ん中は犬秋うらら
名月や犬抱く妻に呼ばれたる
廃屋をすつぱり覆ふ蔦紅葉
思い切ることも大事や松手入れ
八冠の藤井聡太や天高し

徳島 平岡 功

露草や野辺に散らばる空の青
水澄むや倒影美しき金閣寺
爽やかや少女のピアス海の色
五百羅漢ならぶ暗闇鉦叩
露の身や一日ひと日を確と生く

石井 木内 マヤ

ババロアのふるふる揺るる十三夜
散弾のごと八方へ稲雀

卓球のラリーいつまで秋暑し
草の花仏に白き餅まつる

秋の夜バイエルの音たどとし

小松島 岡田 あゆみ

かなかなの瀬音に混る祖谷の峽

野仏の歩きさうな花野かな

葺替へを終へし社殿や鵲高音

登り来て今宵の月を待ちにけり

楽隊に紛れ込みたり秋の蝶

室戸 安岡 みさき

少年の日向の匂ひ秋高し

秋高し遠目差の龍馬像

秋深む海一望の父母の墓

虫の音をかき消す波の声高し

十三夜姉を連れ出す車椅子

長崎 丸本 祥夫

おくんちや担ぐ傘鉾四十貫

虫籠の中に霧吹き父の部屋

土の香とともに引きたる牛蒡かな

○満月や海に一番近き駅

縁側に足踏みミシン秋団扇

酒樽の箍打つ音や竹の春

西海 山下 敦子

桑の葉の先より落つる秋の雨

黒猫の影引き摺りて月の庭

葉月潮尻を浮せる捨て小舟

梨剥ける夫の肘より梨の汁

村最後の店閉りけり九月尽

那覇 大湾 宗弘

屋根に干すさらし一反秋の空

眩しさや鷹の渡りを見失ふ

○また猫にいぢられてをり穴まどひ

飛鯊の跳ぬる光やひるぎ林

夕月へ雲のさざなみ重り来

那覇 中本 清

○暁の虚空を傾ぐ鷹柱

淡き日をのせ秋蝶のうすみどり

収骨の波立つ風や草じらみ

台風過たふれ榕樹の戦さ傷

月光の淡し再建御柱

西原 宮城 勉

秋蟬の一途に計報届きけり

小鳥来る祭支度の集会所
風去りしあとささめきて萩の花
灯台の闇切るばかり月の雨
鳴き合うて風を操る差羽かな

豊見城

渡真利真澄

更地はや花野となれる日差しかな
八千草に隠れたつもり親子猫
渡り鳥の影を増せり三角池
新北風や城主の墓へ一つ径
首里城の門街の灯の秋めけり

ベルリン

鈴木波江

誰もゐぬ菜園通り小鳥来る
菜園の垣越し花梨の実たわわ
戸口にてたぢろぐ猫や秋微雨
枅の実の落ちて跳ね飛ぶ通学路
黄落の園を廻りて日の暮るる

謹告

鍋島広子氏なべしまひろこ（同人・佐野）はご療養中の
ところ令和五年十一月五日逝去されました。
享年八十八。

比嘉半升氏ひがはんしょう（同人・沖縄）はご療養中の
ところ令和五年十一月九日逝去されました。
享年八十一。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

万象俳句会

同人会だより

令和6年を迎えて

同人会会長 曾根 満

令和6年の新春を迎え、みなさん明けましておめでとうございます。

同人各位の益々のご隆盛を祈念し、また新同人の同人会への新風を期待しております。

昨年10月、同人会総会は、初の試みとして令和5年度「万象」全国大会と同日に開催されました。74名の参加をいただきました。この同日開催について、ご意見ご提案をいただき、ますます充実した同人会総会にしていきたいと思えます。ご協力方よろしくお願い申し上げます。令和6年を迎え、同人会としての主たる事業は、従来通り、中山純子記念俳句賞の実施とオンライン同人会の推進です。

中山純子記念俳句賞は、中山純子先生の「風」「万象」におけるご功績に敬意を表し、顕彰するものです。その意味で、同人多数の応募をお願いいたします。

オンライン同人会は順調に開催されております。同人句会の意図は、同人の鍛錬の場としての充実・発展を期待するものです。皆さんの更なる参加をお願いいたします。同人会の目的は「主宰を補佐し万象俳句会の発展に寄与すること」です。その具体的な一つとして会員の獲得に尽力しましょう。「一同人一会員」を目標に頑張りましょう。

以上、新年に当たりご挨拶申し上げます。

11月の「万象」オンライン同人会高点句

- | | | | | |
|-----------------|--------------|-----------------|-------------------|----------------|
| 3 | 4 | 5 | 6 | 11 |
| 上着脱ぎ秋暑の街を欣一忌 | 稲刈や最終バスを背で送る | 鯨見の櫓の島に櫓の実 | キーウバレエ見しより秋思深まりぬ | 牛蒡掘る棒立ちといふ小休止 |
| 中條 睦子(金沢) | 曾根 満(静岡) | 鈴木 波江(ベルリン) | 柳澤 宗正(横浜) | 下嶽 孝一(東京) |
| くろまめの枝のねじれも丹波かな | 山本 右近(さいたま) | 岩崎 武士(静岡) | バトン・トワラー片手で秋を回しけり | 峽に生き今年限りと蕎麦を刈る |
| 江見 悦子(東京) | 中鉢 弘一(札幌) | 丸本 祥夫(長崎) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 宮西 修一(徳島) | 下嶽 孝一(東京) | 鈴木 波江(ベルリン) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 成瀬真紀子(射水) | 古川 京子(柏) | 捨案山子爺に抱かれて帰りけり | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 大久保 進(川崎) | 神田美穂子(富士) | 窯出しにかかる貫入雁のころ | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 桑原優美子(東京) | 中鉢 睦子(金沢) | ひと塩を振りし秋刀魚の眼に力 | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 三屋 英俊(佐倉) | 中鉢 睦子(金沢) | 嫁ぐ娘と語らひ尽きぬ夜長かな | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| 繁幸(大阪) | 中鉢 睦子(金沢) | 行く秋の沖へ涙を捨てにけり | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 揺れて着く一輛電車雪迎へ | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 語り出すことば奪ひて秋の雷 | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 上着脱ぎ秋暑の街を欣一忌 | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | くろまめの枝のねじれも丹波かな | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 江見 悦子(東京) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 宮西 修一(徳島) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 成瀬真紀子(射水) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 大久保 進(川崎) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 桑原優美子(東京) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 三屋 英俊(佐倉) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |
| | 中鉢 睦子(金沢) | 繁幸(大阪) | 曾根 満(静岡) | 曾根 満(静岡) |

(＊句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に春・夏・秋・冬を入れてみましょう。

- 1 □河を越すうれしさよ手に草履 与謝蕪村
- 2 みちのくの伊達の郡の□田かな 富安風生
- 3 此木戸や鎖のさゝれて□の月 宝井其角
- 4 市中は物のにほひや□の月 野沢凡兆
- 5 石山の石より白し□の風 松尾芭蕉
- 6 □めきてものの果てなる空の色 飯田蛇笏
- 7 初□の竹緑なり詩仙堂 内藤鳴雪
- 8 □や昔十五万石の城下かな 正岡子規
- 9 プラタナス夜もみどりなる□は来ぬ 石田波郷
- 10 □風や模様のちがふ皿二つ 原 石鼎
- 11 □草に汽罐車の車輪来て止る 山口誓子
- 12 □の雲ながめてをればうごきけり 日野草城

【正解】

- | | | |
|------|-----|-----|
| 9 夏 | 5 秋 | 1 夏 |
| 10 秋 | 6 春 | 2 春 |
| 11 夏 | 7 冬 | 3 冬 |
| 12 春 | 8 春 | 4 夏 |

思い出す人々

西山 厚 全24回

第11回 【明恵上人】

明恵上人の奇妙な歌を知ったのは高校生の時だった。

あかあかやあかあかあかあかあかあか

あかあかあかあかあかあかあかあか

好きだった。あかあかは月が光り輝いている様。明恵上人は月が

それにしてもおかしい歌。耳を切ったり、島に手紙を書いたり、明恵って変な人だと最初は思った。

その明恵上人のことを調べるようになって、今の私がある。人生、一寸先は、闇か光か。この歌のよさがわかったのは、かなり時間が経ってからだった。

昭和43年（1968）、日本人として初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成は、「美しい日本の私」と題する記念講演のなかでこの歌を紹介したが、大きな誤りを犯してしまう。

あかあかやあかあかあかあかあかあか

あかやあかあかあかあかあかあか

似て非なる歌。これでは零点。明恵上人の歌が素晴らしいのは作がないからだ。川端康成は作爲のなさに耐え切れず、無意識のうちに改変したのだろうか。

同人作品の佳句

江見悦子

括りても思ふがままに萩の風 林 陽子

『万葉集』で梅よりも多く詠まれ、秋の七草の一つとされている萩は、昔から日本人の日常のすぐそばにあった。沢山の種類を総称して萩と呼んでいるが、よく見られるのが宮城野萩、紫紅色の小花が分れた沢山の枝に開き、風に揺れる様は美しい。この句、枝垂れた萩を束に括ってみても、風のままに吹かれているという情景。「括りても」の主語は作者、「思ふがままに」の主体は萩で、主格がねじれてはいるが、それを不自然に感じさせない句になった。

櫛老い泰然として時雨受く 森山曉湖

すっかり葉を落とし、樹皮の剥れた櫛の老木を眼前にして、その姿を「泰然として」と受け止めている作者。冷たい時雨の中にあつて動じることのない老木と対話し、その有り様が自分自身に重なるという、対象との一体化を感じさせる。櫛に注がれる眼差しは自身への眼差しでもある。擬人法の句であることを忘れさせる。

数独の難なく解けてむかご飯 阿部 澄

澄さんのご趣味は数独、かなりのレベルに達していらつしやるのではないか。今日は難なくパズルが解けて、夕食のむかご飯が実に美味しい。日常の中の幸せな時間だ。ちなみに、

数独は「数字は独身に限る」の略だとか。

冬瓜をほいと放られたたら踏む 大内佐奈枝

山積みになった冬瓜を眺めていると、「さあ持つてけ」とばかりに中の一つが投げてよこされた。大きな冬瓜ではないのかもしれないが、放られたら驚き焦る。受け取るうたたたらを踏んだ、という一瞬を句にした、俳味たっぷりの句。

蜥蜴曳き蜂曳きて蟻穴に入る 久保村淑子

「蟻穴に入る」は、秋の季語「蛇穴に入る」の傍題。夏の間せわしなく動き回っていた変温動物の蟻は、外気温が下がってくる姿を見せなくなる。春が来るまで果の中で冬を過ごすための準備なのか、干からびた蜥蜴や蜂を曳き摺っていく。上五と中七のリフレイン、中七から下五にかけての句まがり、蜥蜴、蜂、蟻と重なる虫偏の漢字表記が面白く、どつしりとした句になった。

切株に浄めの塩と今年米 久留島規子

切られたばかりの切株だろうか、その上に塩と新米が供えられている。社の境内か、或いは村落の入口近くか、様々な場所が思い浮かぶ。古来日本人は森や木、岩などの自然物に神々が宿ると信じ、注連縄を張ったり、神社を設けたりしてきた。一種の自然信仰である。そんな背景を考えると、この句の鑑賞が深まる。

棟梁の一声つるべ落しかな 草間三香子

季語「釣瓶落し」は、秋の落日を、まっすぐに井戸に落ちていく釣瓶（水を汲むために竿や縄の先に井戸の中におろす桶のこと）に喩えたもの。「今日の作業は仕舞にするぞ」と

いう棟梁の一声で、あつという間に日暮れていく秋の夕暮を詠んだ。三か所の「ト」の破裂音が、リズムを作っている。

月涼し 鎌倉山にけもの道 恒川 清爾

鎌倉山は、鎌倉市の鎌倉山一丁目から四丁目までを指す、標高100mほどの丘陵地帯である。昭和初期に別荘地として開発され、戦後は進駐軍に接収された時期を経て、眺望の良い住宅地として再開発された。

名月に誘われて山深い鎌倉山を散策していると、けもの道に迷い込んだ。どこに通じている道なのか、これも又月見の一興と思っている作者。季語「月涼し」で決まった。

夫の手も出て山栗を剥きにけり 宮崎知恵美

山に自生する栗が山栗、そんな山栗をたつぷりと手に入れることのできる暮しが羨ましい。栽培されている栗とは違って、実の入りは十分ではないかもしれないが、剥いて栗御飯などに料理する楽しさは格別だろう。作者がせっせと剥いていると、思いがけず夫の手が加わったという。ご夫婦の会話が始まったような想像も膨らむ。人恋しい秋の季節である。

日本海の風を握りて稲を刈る 成瀬真紀子

稲刈り機ではなく、一束ずつ手に握っては、鎌で稲を刈っている情景を詠んだ。日本海のすぐ隣まで棚田が続いている、能登の白米千枚田のようなところかもしれない。刈り手は、日本海の風も一緒に握っているのだ、と感じた作者。鎌で刈る音と稲の香りが、日本の稲作農業の原初の形を思い起こさせる。

暮の秋我を放れず杖の音 中條睦子

作者の中條さんは、昨年夏、思わぬ貫い事故で脚を骨折し、

現在リハビリを続けている。ウォーキングに取り組み、秋の大会にも、杖を必要としながらもお元氣に出席された。この句、「我を放れず」に注目した。この「ず」は、打消の助動詞「ず」の連用形だろう。今はすっかり馴染んだ杖の音だが、時に杖を手放せない自分を放りだしたくもなる。が、そうもいかない。「暮の秋」という季語が動かない。中條さんの日も早いご回復をお祈りしたい。

子の爪立ち親の爪立ち 林檎狩 河野尚子

林檎狩の一場面。子も親も爪先立って林檎を挽ぎ、籠の中に収穫している。リフレインの効いた、すっきりとした句。林檎の香りも漂う。心弾む、幸福な家族の林檎狩だ。

満月や海に一番近き駅 丸本祥夫

平易で分かりやすい句。「海に一番近き駅」で一氣に情景が膨らむ。小さな駅に停まりながら、電車は海沿いを進んで行くが、海の景色が一番よく見える駅で降りた作者。波間に映る満月の光、波の音、心に沁みる月見の夜となった。

暁の虚空を傾ぐ 鷹柱 中本 清

「鷹柱」が秋の季語、『沖繩歳時記』にはこうある。

鷹柱はタカの類、特にサシバの群が、南方に渡るのに先だつて上昇気流をとらえ上昇する様子をいう。多数の鷹が柱状に集まる。

夜明けがた、鷹柱を仰いだ作者。しかもその鷹柱が傾いていたという。何とも氣宇壮大な句だ。俳句に詠むことのできた作者の幸せを思う。

鷹柱ずんずん空の深みけり 岸原清行

令和5年「万象」同人会総会・全国俳句大会報告

明るい光に包まれて

令和5年度「万象」全国俳句大会が、10月23日(月)にホテルグランドヒル市ヶ谷で開催された。令和元年の大会以来4年ぶりの開催に全国各地から93名が集った。大会を祝福するのように秋晴れの日であった。

4年ぶりの大会は、これまでと大きく形を変えて行われた。特筆すべきは、今回初めて、同人会総会との同日開催が実現したことである。また、大会での表彰や新同人紹介なども4年分となり、進行に工夫が凝らされた。

10時半の受付には既に多くの参加者が集い、旧交を温めての会話が溢れていた。和やかな雰囲気の中、11時より同人総会が開幕した。司会是小川明美さん。まずこの間に亡くなられた方々への黙祷が捧げられた。

曽根満会長の挨拶に続き総会議事が始まった。

令和4・5年度の事業報告が沢田たけし幹事長より、令和4年度収支決算報告が大久保進會計からあり、監査報告、令和5年度収支予算案が承認された。続いて、第5回中山純子記念俳句賞の表彰、江見悦子主宰のお祝いの言葉、受賞者の成瀬真紀子さんによる受賞の言葉と続き、中條睦子副会長の閉会の挨拶で、同人会総会はつつがなく終了。

12時より同じ会場に会員が入場し、令和5年度の「万象」全国俳句大会が久留島規子さん、小池清晴さんの司会で始まった。中村千久大会実行委員長の開会宣言に続き、江見悦子主宰挨拶、内海良太名誉主宰の挨拶と続く。

江見主宰は、この4年間のコロナ禍の困難の中を「万象」が新しい試みをして活動の活性化を図ってきたこと、昨年、新主宰となり内海名誉主宰の「気宇壮大」の精神を受け継ぎ発展させていく覚悟などを語られた。

内海良太名誉主宰は、三代目主宰の任を全うされ新主宰に無事バトンタッチした安堵感を語られた。また、福島せいぎ顧問、柳澤宗正顧問とご自身の三人が、昭和13年生まれの人組として「万象」の活動を担ってきたことなどを回顧された。感謝の花束を桑原優美子さんが代表してお渡しした。

次に中村千久編集長より、昨年度から編集部員・校正係ともに各地の方々にお願ひするようにし、内容も整理したことなどを報告、編集部・校正係の紹介があった。

続いて来賓・橋本清氏のご紹介があり、ご挨拶をいただいた。橋本氏は「万葉集」の研究家で、「万象」誌に内海名誉主宰の「古典と遊ぼう」と隔月で「万葉集」にたずねる抒情の源流」の執筆をお願いしている。

その後、詳細な令和4年度会計報告が松浦陵保会計担当からあり、塗木翠雲会計監査からの報告を経て承認された。また、令和5年度予算案が可決された。

祝宴は福島せいぎ顧問による乾杯の発声で始まった。しば

らくフランス料理に舌鼓をうち懇談が続いた。

20分後、表彰が始まった。4年分の受賞者の紹介である。

「万象」俳句賞は内田郁代さん、新人賞は小川明美さんに
よって披露された。

「万象」俳句賞は

令和2年 内海保子さん 「出羽路」

令和3年 藤原千代子さん 「茶摘笠」

令和4年 林 陽子さん 「水の音」

令和5年 小坂橋泰山さん 「緑さす」

新人賞は

令和元年度 中鉢弘一さん、

令和2年度 小坂橋泰山さん、木内マヤさん

令和3年度 三村紀子さん

令和4年度 杉澤 修さん

各賞の受賞者に、江見主宰からお祝いの言葉が贈られ、今年度の受賞者には賞品も送られた。杉澤修さんが代表して力強い挨拶を述べた。

続いて、令和2年から5年までの新同人26名の紹介が田中道江さんから行われ、江見主宰の激励の言葉を受けて新同人を代表して店網洋子さんが挨拶に立った。

受賞と紹介が終わる頃、食事はデザートの時間となり、お茶をいただきながら、大会作品の入選句、特選句の発表。披講は小池清晴さんと砂地宏子。

披講後は内海良太名譽主宰と江見主宰から特選受賞者に染筆が贈られた。

内海名譽主宰特選

成瀬真紀子さん、山本右近さん、喜多尾明子さん

江見悦子主宰特選

大長文昭さん、喜多尾明子さん、宮城 勉さん

小林愛子名譽顧問特選

神田美穂子さん、塩井志津さん、新妻奎子さん

内海名譽主宰と江見主宰からの選評が行われた。

次に、各地からの報告が司会の久留島規子さんが各テーブルを回るインタビュー形式で行なわれ、会場は時に笑い声が起る和気藹々とした雰囲気包まれた、その間に、受付係総出で記念のお饅頭が各テーブルに配られた。その袋には福島せいぎ顧問が徳島から持参された「鳴門っ娘」も添えられた。楽しい時はあつという間に過ぎ、南雲秀子大会副実行委員長長の閉会の言葉で終了した。

大会後、全員揃っての集合写真を撮り、参加者はさんざめきながら会場を後にした。

最後に、この大会の為に朝から旗を持ち、誘導を担当した松浦陵保・塗木翠雲・中嶋久登さん、受付からお土産配付まで担ってくださった穂刈照子、久保村淑子、村田優美子、一由久美子、横川良子、鹿毛満子、岡村純子、三村紀子、桑原優美子、中谷由郁、南雲秀子さん、記録・写真を担当してくださった大木茂さんをご紹介して御報告を終えます。

(大会実行委員・砂地宏子)



江見悦子主宰挨拶



内海良太名誉主宰挨拶



中村千久編集長挨拶



曾根 満同人会会長挨拶



福島せいぎ顧問乾杯発声



橋本 清氏挨拶



成瀬真紀子氏受賞



名誉主宰に花束贈呈



新同人紹介風景



新人賞受賞者 (左から三村、中鉢、杉澤の各氏)



参加者集合写真

木曾の秋

小板橋泰山

むらさきの御嶽山や雁渡る
十六夜や瀬音がすかな柚の径
秋の声竹を括りし井戸の蓋
次郎柿売る里人の声高し
草食みて尾を振る牛や秋茜
秋高し牧場を駆くる母仔牛
寝静まる宿覆ひたり虫時雨
菊日和数珠かけられし石仏



草の上風に菌向かふ轡虫
浄め塩撒きし土俵や今朝の秋
列なして四股踏む子らや柿紅葉
谷川の風に揉まるる秋の蝶
紅葉山御堂に灯る小蠟燭
野菊咲く肩幅ほどの獣道
道しるべ黄葉にしづむ峠口

小 春 谷 渡 末 枝

剝製の雉子微動だにせぬ小春
 白鳥来波紋拡ぐる湖の朝
 庭仕事大綿の絮肩に舞ふ
 凍蝶や倉庫二階を仮住ひ
 豚足を煮詰む木枯戸を叩く
 檻樓切れで牛の貌拭く小六月
 けもの道落葉に埋る毘錆びて
 冬川を渉り切れずに手負ひ猪
 兎の皮剥ぐ小刀を血の伝ふ
 紛れなく馬の瞳にある寒さかな



「なんでこれまで俳句を続けてこられたのか」と思う時、真つ先に「人との出会い」が頭に浮かぶ。

振り返れば貴重な出会いが幾つもあって、多くの先達と親しくさせていただいて今日に至っている。

俳句を通じた縁、「俳縁」が様々な場面で生まれ、繋がりが、それを今日まで大切にしてきたお蔭で俳句を続けてこられたと、改めて全てに感謝している。これからも、積極的に新しい「出会い」を求めている。

五湖の里

靄田勝子

献上の極上実梅紅をさす
遊覧船緑蔭くぐる湖境
船神輿海へ漢の落し合ひ
秋立つや開くる艇庫の彩幾重
雁渡し舟小屋二棟湖の暮れ
湖山の狭間のくらし竹を伐る
天空のテラス自在に赤とんぼ
年縞の七万年や湖の月
しぶき上げ青竹叩く冬の漁
水中に裸の荒男綱を引く



三方五湖は私の住んでいる敦賀の隣の美浜町、若狭町にまたがる三方湖、水月湖、菅湖、久々子湖、日向湖の五つの湖の総称です。

周辺は緩やかな山々に囲まれ、裾野は梅畑や田畑が四季折々の景色を見せてくれます。五湖はそれぞれが水路で繋がっており、日向湖は日本海にも繋がっています。近くは梅丈岳(ばいぢょうだけ)の山頂公園からは日本海と五湖が一望でき、素晴らしい絶景です。季節が変わるたび、五湖周辺を訪れています。

*年縞(ねんこう)……

縞模様
湖底堆積物

クジラの町 正田華子

昭和36年、多摩川から2千万年前のクジラの化石が発見された。毎年8月にはくじら祭が盛大に行われる。

そんなクジラの町(昭島市)の十句である。

分水の流れふくらむ赤とんぼ

崖の水含めば軽し今朝の秋

一句目、多摩川の流れを稲作用に分配する「分水」。

その流れが、「ふくらむ」ほどに豊かなのである。「赤とんぼ」が、その流れに飛び交う景がいい。

二句目、「崖」とは武蔵野台地の跡か。そこから出る「崖の水」を含むと、あっさりとして軽やかなのである。

「含めば軽し」と「今朝の秋」の呼応がいい。

工場の跡に住み継ぎ走り蕎麦

「工場の跡」とは、戦前の昭島飛行機工場や陸軍航空工場の跡であろう。戦後その跡地に長く住み継いでいる多くの市民。「走り蕎麦」は戦後の暮らしへの感慨である。

多摩川にクジラの骨や葦の花

「クジラの骨」の出た多摩川。今は何事も無かったかにそよぐ「葦の花」。切れの「や」は、多摩川への郷愁。

秋祭張りぼてくじら練り歩く

秋祭に「張りぼてくじら」が「練り歩く」とは、楽しい。クジラロードを、張りぼてくじらが泳ぐのであろう。

クジラの町(昭島市)への深い慈しみの十句。

遊行のお砂持 倉谷ます美

藤沢市の時宗総本山遊行寺と敦賀市の氣比神宮は「お砂持」の故事で繋がりがあるといふ。さて、故事の「お砂持」とは何であるかの十句である。

新法主さまの来敦新樹光

遊行寺の新法主一浄上人は、お砂持の故事再現の為、

5月に敦賀へ来られた。「新樹光」の季語が、新法主様をお迎えする、信仰の厚い敦賀の人々の喜びを表出。

法螺高く若葉参道お砂持

「法螺高く」響き渡る「若葉参道」を、「お砂持」の行列が行く。新法主様の荘厳なお砂持の列である。

青時雨泥池に遊行砂均す

「青時雨」は、「青葉のころに雨が上がつたあとの木の下を通ると、葉に溜まっていた雫がはらはら落ちてくること」と角川合本俳句歳時記にある。青時雨の中「泥池に」遊行様が「砂均す」。この行為が、故事に則った「お砂持」であろう。

「青時雨」の季語がいい。

氣比へ満つ踊り念仏鉦涼し

時宗一遍上人が広められた「踊り念仏」。太鼓や鉦を打ち念仏・和讃を高唱する所作が踊りに似ているという。

その「踊り念仏」が「氣比へ満つ」である。喜びに溢れる氣比神宮の賑やかさ。「鉦涼し」が一服の清涼感となる。

「お砂持」の行事を丁寧な描いて頂いた十句である。

同人作品鑑賞（十一月号） 中本 清

桑港へ八十五歳の夏の果て 島田和枝

ペリカン群れ金門橋の夕焼け雲
ヨセミテの流れに浸り暑に耐ふる

夏も終らんとする時期の米国西海岸の旅吟三句。桑港は、「ソウコウ」と読み、サンフランシスコの意。なお、紐育はニューヨーク、羅府はロサンゼルス of 漢字表記である。

赤錆色に彩色された金門橋に、夕焼け雲がかかる。ペリカンの群は、フィッシング・ピアの釣り人の餌に寄ってくる。時に下手な羽搏ちで、夕焼け空を弾く。一方、ヨセミテでは大自然に抱かれて、溪流に身を浸した。旅先で自らの来し方の記憶が重なり、時の移ろいを実感したのである。

砂を吐く貝のつぶやき 熱帯夜 下嶽孝一

日本列島が猛暑に襲われた今年ほど「熱帯夜」の季語が使われた年は無いであろう。暑くて寝苦しい夜は、涼気を思い浮かべる言葉が欲しい。

この句の眼目は、貝の砂吐きを擬人化して、「つぶやき」と切れを入れたところだ。今年はX社（旧ツイッター）が誕

生し、全世界の人間がつぶやいた。ちなみに、最近の眠りの科学では、「熱帯夜」での入眠に必要なのは体温低下だとしている。

筆置いて耳をあづくる青葉木菟 中條睦子

俳句は、調べで決まる。「筆置いて」と上五で軽い切れを置く。「耳をあづくる青葉木菟」に続く韻律が心地良い。

「青葉木菟」は、野山に青葉が繁る頃、南方からやって来るフクロウ科の鳥で、ホーホーと鳴く。夜鳴く鳥ゆえに人の孤独感と結びつく。

見はるかす向日葵畑の風 高田たみ子

作者の住まいは金沢だから、おそらく、広大な河北潟干拓地の「見はるかす向日葵畑」を詠んだのだろう。近くには、西田幾多郎記念館がある。「渇の風」は、内灘を渡る風。沢木欣一が詠んだ〈鉄板路隙間夏草天に噴き〉、の内灘である。

白らかにひと日はじむる醉芙蓉 松井佐枝子

醉芙蓉は、朝に白い花をつけ、昼頃は徐々にピンク色に変化し、午後には紅一色となり、夕刻には萎んでしまう一日花。朝の醉芙蓉には「白らか」で、際立つ美しさがある。

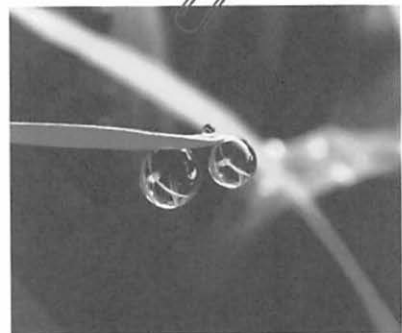
「白らかに」始まる作者の「ひと日」。豊かなひと日になるだろう。

わたしの 歳時記

草の露

「万象」

江見悦子



「吉田の火祭り」に出掛けた時のことです。

この祭りは毎年八月二六・二七日、山梨県富士吉田市上吉田で行われている、北口本宮富士浅間神社と境内社諏訪神社の秋祭です。

上吉田の町は、江戸時代から富士山の信仰登山のための御師の家が町並みを作り、今でもその面影を残しています。各地からの富士講の信者は御師の家で草鞋を脱ぎ、御師の先導で富士山に登ります。最盛期の上吉田には八六軒もの御師の家があったそうです。

祭り初日、神事を終え神輿が御旅所に担ぎこまれると、高さ三メートルの九〇本の大松明に点火され表通りは火の海と化します。

通りに並ぶ御師の家の、石柱に掲げられた提灯に惹かれ「タツミチ」と言われる、玄関

まで続く長い小径を辿ってみました。闇の中に小さな灯が点々と置かれ、祭りの喧騒とは打って変わった静けさに、異次元の世界に迷い込んだような錯覚を覚えました。

『伊勢物語』の「芥川」と呼ばれる章段(第六段)に、女を盗み出した男が暗い夜に逃げる話があります。途中草の上に置いた露を、女が「かれは何ぞ」と問いますが男は答えず、あばら家に女を隠します。夜の明けると、雷鳴の中で女は鬼に喰われてしまい、男は地団太を踏んで嘆き、次の歌を詠みます。

白玉か何ぞと人の問ひし時

露と答へて消えなましものを

そんな哀しい道行を思い出させてくれた、火祭りの夜となりました。

御師の家へたどる灯や草の露
白露のこぼれて直ぐに地に還る
セロ負うて露けき町を通りけり
しろがねの露まみれなる草の原
露の玉仏足石の上にかたかな
魚影の走るせせらぎ露の径
露しとど教会跡のルルド像
離農の田雑草開けり露しとど
朝露の草を跳ねたる雀かな
大蟻の触角ふるるる芋の露
掘りどころなき一滴の蓮の露
露けしや最終バスの灯のうるむ
芋の露転がり歪み玉と散る
古九谷の緑の余韻露けしや
逝きてより通ふ心や草の露
露むぐら熊撃ち影のやうに行く
輝きて露凝る湖の夜明けかな
大粒の朝露今日も上天気
白露や二畝崩す土竜道
西山莊茅屋に光る露の玉
露の玉葉に青くまた実に赤く
朝ごとに生るる宝珠芋の露
露けしや遺影に添ふる初句集
野面積みのてつばりへこみ露種
朝露や貨車連結の鉄の音
出棺や庭の草花露こぼす
紅のあざやかに散り露の薔薇
白山の風に遊びて芋の露
石二つ名のなき露の遍路墓
島果てが棄民の奈落露けしや

江見悦子
内海良太
小林愛子
中村千久
福島せいぎ
柳澤宗正
曾根 満
松原智津子
亀田やす子
沢辺たけし
吉中愛子
根本文代
神田美穂子
井村和子
前田貴美子
岡本敬子
林 陽子
森山映湖
大木 茂
内田郁代
三屋英俊
下 徹孝一
喜多尾明子
藤原千代子
岩崎武士
成瀬貴紀子
中條睦子
倉谷紫龍
安岡みさき
宮城 勉



寒土用ねぶる秘蔵の蝮酒

私に与えられた句は「蝮酒」である。私は全く酒が飲めない下戸。その上、大の蛇嫌い。縄切れを見てもびくつとする。

しかし、これも句縁、俳縁、勝手な評を許されたい。

一読、眼前に浮かぶのは、卓上に置かれた年代物の蝮酒である。マムシは日本各地にいる毒蛇であるが、焼酎に浸した蝮酒は強壮剤として知られている。病後や体力の衰えたときに飲むとよく効くという。

この句の蝮酒は夏の季語であるが、ここでは「寒土用」が季語として大きな働きをしている。寒は一月五日ころから立春の前日までのことだが、寒土用のころは寒さがもつとも厳しくなる。正月行事も終わり、ほっとして体の疲れが出るときである。悦子さんは、「万象」発行人として多忙を極める中で、たびたびの宿病を克服され、明るい気分で迎えられた令和二年の正月明けの句である。

今まで眺めるだけであった「秘蔵の蝮酒」。琥珀色をして、いかにも効きそうである。蝮酒を少しねぶつてみる。この句においては、「ねぶる」の動詞一語が重要である。「飲む」では、悦子さんの思いは伝わらない。恐る恐るねぶつてみたところに、明日からの活力にしようとの意志が込められている。

(福島せいぎ)

辻立ちの寒行僧の眼に恋す

寒行とは、二十四節気の一つである小寒から節分までのいわゆる一年中で最も寒いとされる寒中に、僧侶が行う修行のことである。また辻立ちは街角や路傍に立つて僧がお布施を頂く托鉢のことで、寒中には寒行托鉢が行われる。

掲句はその寒行において辻立ちをしているうら若き僧侶にたまたま視線を留めたのである。しかし、この邂逅こそがこの様な見事な作句の真髄なのであろう。

辻立ちをする若い僧の澄んだ眼差しには、気を浄化するような深い内省と信仰への確たる決意が窺てとれると共に、無我の心で利他に生きんとする眼差し、邪心を寄せ付けない清らかで透明感のある眼差しが窺える。それはあたかもかの興福寺の阿修羅像の面影さえ偲ばせているのである。

一休禅師の言葉に「仏界入り易く、魔界入り難し」とあるが、輪廻を仏教のごとく心の状態と捉えるならば、この句の作者はこの時点で既に仏界を通して魔界入りを遂げているのではなからうか。それ故、恋とは絶対の純粹美を象徴するものへ鮮明に心を寄せることと捉えたのであろう。

それにしても、「僧の眼に恋す」とは実に大胆不敵な表現であるが、つまるところこの見事な句は、作者の魔界からのメッセージなのである。

(山本右近)

子規俳句の魅力―初期の作品から（一）

沢木欣一

正岡子規は明治十六年六月、松山中学を退学後、上京した。そして十七年九月には東京大学予備門に合格する。「落第の積りで戯れに受けて見た」というが、大きな喜び以上に驚きと不安を感じたらしい。神田の下宿で人情本や発句の本を読み、発句をつくって友人にもすすめていたという。

作句の始まりは通説では二十年大原其戎（きじゆう）に入門したときとされているが、実際は明治十八年夏、松山に帰省したころから始まる。（粟津則雄『正岡子規』による）

朝霧の中に九段のともし哉
柿の実の火ともえいでて寒さかな

朝霧の句は単純明快で子規の代表作のなかに入れてもよい。实景に即して純真に詠んだ迫力がある。

しかし、其戎に学んだときは俳句についての知識に乏しく「行々子」を何と読むか、「浮果」が何であるかを知らなかったという。

『俳句の初歩』（明32）に子規が初めてのころ好んでいた句の特徴を挙げているが、月並俳句そのものである。現在でも大いに通用するので引用しておきたい。

「理窟（りくつ）を含みたる句」「譬喩（ひよ）の句」「擬人法を用ゐし句」「人情を現したる句」「天然の美を誇張的に形容したる句」「語句の上に巧を弄する句」などである。最初の理窟については、理窟は美を含んでいないと断定している。

十九年・二十年は低調だが、二十一年以降、

梅雨晴やところぐに蟻の道（明21）
青くと障子にうつるばせを哉（々）
燕の飛ぶや町屋の蔵がまへ（明22）
あた、かな雨がふるなり枯葎（明23）
桃さくや三寸程の上り鮎（々）

子規は明治二十二年の五月、咯血、一週間ほど毎日五句ほど続いたという。

卯の花をめがけてきたかほと、ぎす

二十三年、第一高等中学を卒業、九月、文科大学哲学科に入学、翌年、国文科に転じた。大学入学後「俳句分類」という壮大な仕事にとりかかり、『虚栗（みみくり）』に「ある高尚なる趣味」を感じ、『猿蓑（さるまの）』にいたって開眼した。「俳句界は猿蓑に至って始めて目を覚ました」（『俳諧三佳書序』）という。（次号につづく）

「子規・写生―没後百年―」（沢木欣一編 角川書店 より抄出）

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑩

橘本 清

降る雪は あはにな振りそ

吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに (二・二〇三)

「雪よ、もうそんなに沢山は降らないでくれ。吉隠の猪養の岡が寒くてならなくなるだろうから。」

但馬皇女が亡くなった後、穗積皇子が詠んだ挽歌。「冬の日雪の落るに、遥かに御墓を望み、悲傷流涕して作らす」と題詞にあります。「流涕」は涙を流すこと。

但馬皇女は天武天皇の皇女で、第五皇子穗積皇子の異母妹。第一皇子高市皇子の宮にいた時、「竊かに穗積皇子に接ひ」と一六番の題詞にあるので、穗積皇子とただならぬ関係にあった女性ようです。

言わば禁断の恋の相手とも言うべき彼女に先立たれた喪失感。それを生前と同じようにその人の身を思いやることで、何とか埋めようとしているのです。墓に眠る者はもう何の感覚もないはずなのに、なお生けるかの如く思うことで、胸の空虚を満たそうとしている。題詞には「悲傷流涕して」とあるけれど、歌の方ではそれを表す語句は用いていません。だから、かえって悲痛な思いが読む者の胸に突き刺さるように伝わってくる。

「吉隠の猪養の岡」は墓所のある所。今の奈良県桜井市吉隠のあたり。「あはに」は、ここにしか見えない語。多二と同じ意味とする説が有力です。「寒からまくに」のマ

クは、推量の助動詞ムのク語法。『万葉集』に多く出て来る語法でクは活用語を体言化する接尾語。ここは後続の二を受けて順接の条件句になっています。

但馬皇女が亡くなったのは和銅元年(七〇八)。それから丁度千二百年後の明治四十一年(一九〇八)、『明星』の歌人山川登美子はこんな歌を作りました。

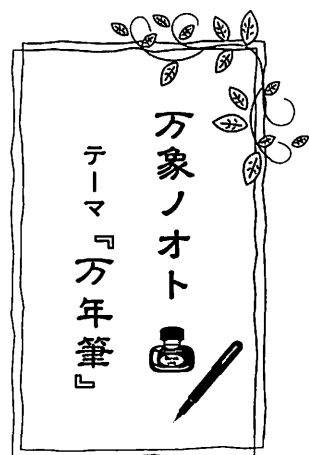
山うづめ雪ぞ降りくる

かがり火を百千執らせて御墓まもらむ

「父君の喪にこもりて」という前書があるもので、父が葬られている山を埋めるように雪が降ってくるけれど、墓が雪に埋まらないよう、沢山のがり火を人々に持たせて守ってやりたいという歌です。これもただ死者を悼むのではなくて、あたかもまだ生きているかのように思いやることで、大切な人を失った後の虚脱感から立ち直ろうとしているのです。

父危篤の知らせで福井県遠敷郡竹原村(今の小浜市)に帰って来た作者も既に胸を病んでいて、そのまま病臥する身となっており、一年後、二十九歳で亡くなりました。自らも病床に臥しながら、なお亡き人のために何かをしてやりたいと願うけなげさが何とも痛ましい。

古来、死者は墓に眠っているものとされてきました。先年ヒットした『千の風になつて』という歌曲を聞いた時、冒頭の「私のお墓の前で 泣かないでください」という私はいません 眠ってなんかいません」という歌詞に、新鮮な違和感とも言うべき、一種の感動を覚えたのは、多分私だけではないでしょう。



私を救った万年筆

静岡 大長文昭

私の手元には、書くためではなく考
えるための万年筆がある。職場の命令
で42歳の時、東京での研修を命じられ、
全国の自治体職員と三か月間職場を離
れ、日常生活に役立つ憲法民法等の法
律の勉強をした。

教授陣は一流で講義も面白かった。

憲法の話は内閣法制局長官で、流れる
ような話術で憲法の話をされ、目から
鱗の落ちた思いだった。民法の講師は
ベテランの弁護士、人差指をまげて、
「部下にこんな職員が来ない方法を教
える」と言う全員が注目した。しか
し「それはただ神に祈るのみだ」の答
えに一同大爆笑。緑化の話では「椎、

櫛、樫」を連呼する教授。鎮守の杜を
作ろうの話は今も懐かしく思い出す。

夜になると酒盛りが始まり、各地の
友人作りに明け暮れた。三か月の研修
終了の記念品は「モンブラン」の万年
筆、これが私の守り神になった。仕事
上の難題が起こるとこの万年筆を手に、
友人の顔を思い浮かべて相談者を探し、
そして助けられた。

今でも手もとの万年筆を時折眺めて
いる。

父の万年筆

横浜 小板橋泰山

私自身は、クロスなどボールペンの
愛用者で、学生時代は別にして、社会
人になってから、万年筆を使った記憶
はほとんどない。

教師をしていた父は、海外や国産メ
ーカールの万年筆をたくさん持つ、万年
筆愛好家だった。父はいわゆる「筆ま
め」で、私が大学入学後、故郷を離れ
て東京で一人暮らしを始めて以来、ブル
ーインクの文字の数枚の手紙を送って
くれた。二カ月に一度ほどの頻度で近

況報告や励ましの内容であった。集中
力がすごいのか、修正箇所が全くない
ことにいつも感心していた。

30年以上も書道が続けた父であった
が、万年筆の方は丸っこい小さな文字
が印象的であった。父の還暦祝いに希
望を聞いて贈った名人入りの万年筆を大
層喜んでくれたことを思い出す。

万年筆

町田 広瀬俊雄

「万象ノオト」の原稿依頼を引き受
けたが、締切りの迫った今頃になって
焦っている。万年筆を使っていたのは
何十年も前のことで、それに纏わる思
い出も忘れてしまったからだ。

偶にしか使わないとインクが出にく
くなって、それではと下手に力を入れ
て使うとペン先を傷める。ペン先は万
年筆の心臓部で主に18金製で、そこ
にはスリット（切り割り）とハート穴と
いう微妙で重要な構造がある。万年筆
は常に文章を書く文筆家にこそ相応し
く、万年筆は書き続けることが長持ち
させる秘訣だと思う。

しかし乍ら現在では、編集作業が簡単なパソコンを使って作品を仕上げる作家も多いことであろう。万年筆の出番は減り、手書きの文字の味わいも貴重なものとなった。

万年筆の思い出

金沢 新出祐子

「万年筆」と言われても、縁が無いし、ぴんとこなかった。しかし、しばらくするとじわりと記憶が蘇った。

高校入試の発表の日の夜、父が仕事帰りに買ってきてくれた小さな箱。開けたら万年筆だった。濃いピンクと白のツートンカラーの物だった。毎日持ち歩いて、生徒手帳に予定やメモや気に入った言葉や……等等いろいろ書いた。もちろん教科書や板書をノートに写すのにも使った。ペン先が柔らかく書き心地がよかった。インクは始め淡い青色だったが、使っているうち徐々に濃くなってくる。その青のグラデーションが海を思わせて素敵だった。

考えれば疑いもせず愛情一杯に育てて貰った、生涯で一番幸せな頃だった。

パイロット通り

伊勢原 山本カツ子

万年筆と言えば、父の使っていた軸の太い万年筆と、スポイトからインクを入れる動作など、今も懐かしい思い出の一つとして残っている。

私自身が万年筆を持ったのは、確か高校入学のお祝いに兄と姉から贈られた物が最初だったと思う。文通が流行した時代、随分重宝した記憶がある。その後はいつの間にかボールペンに。

話は変わるが、私の生まれた平塚市には、旧火薬廠跡地に「パイロット万年筆」の工場があり、敷地を囲むフェンスにはとりどりの薔薇の花が栽培されており、春と秋に沢山の花が咲き、行き交う人々の目を楽しませ、心を和ませてくれている。

薔薇は平塚市のシンボルであり、今でもパイロット万年筆工場と言えば、薔薇の花の香る「パイロット通り」として市民に親しまれている。

初めての万年筆

東京 馬場美智子

万年筆を初めて手にしたのは、高校入学時に親類からお祝いに頂いた時で、とても嬉しかったのを覚えています。

それまでは鉛筆かボールペンしか使っていまませんでした。万年筆はとても滑らかな書きごちで、大変気に入ったのを記憶しています。

最近あまり万年筆は使っていませんが、今後はいろいろな場面ですていきたいと思っています。

「万象ノオト」投稿募集

▽5月号「神 社」(1月末日締切)

▽6月号「蕎 麦」(2月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（十二月号）プロフィール



谷

廣司

（札幌）

谷廣司さんは昭和24年芦別市に生まれ、2歳の折幌別町に転居の後18歳まで故郷とするサロベツ原野で、活発な少年時代を送りました。

昭和48年から、札幌でも有数の「市川造園株式会社」に入社、園芸や造園の専門家として多忙な生活を送り、副社長として経営や後輩の指導に当たり人望を集めました。今年、春漸く半世紀務めた会社を引退しました。

俳歴は長く、平成11年8月に札幌句会に入会、同年10月「風」に入会。

しかし超多忙な現場に追われ句作は苦勞の連続、「褒められた句はほとん

どありません」とはご本人の言葉です。三人のお嬢さんの内次女の春菜さんが23歳で札幌句会に入会、巻頭を二回取る程の才能を発揮したのですが、結婚後札幌を離れ俳句を断念したのは今もって残念な事でした。

最初に注目された句は

サロベツの夏野に消ゆる狐の子
「風」の全国大会で小林愛子特選。

平成15年4月号

掘削機の爪叩きつけ凍土掘る
雪晴れや瑠璃色帯し大鴉
病む父の雪の嵩問ふ目の澄めり
頭より湯気たて深き雪を掻く
以上が大坪景章先生の四句選。

このまま順調にとの願ひむなく、仕事の繁忙はもとよりご両親の死去、お嬢さんの次々の結婚、お孫さんの誕生など家庭の事情、更にご自身のスキで怪我の入院など、落ち着かない年月が続くことになりました。

その間、句会の出席もとぎれ欠句続きでしたが「万象」の会員は継続、俳句と縁を切らなかつたのが今回の巻頭に繋がりました。

札幌句会は静かに廣司さんの復活を待っていました。平成を過ぎ令和を迎えたコロナ禍の最中、目覚めました。

令和4年9月号江見悦子主宰四句選
初夏や豊平川の碧深き

夏寒し宗谷の風はロシアから
○丸顔の胎児の画像新樹光

全摘と決する朝青嵐
令和5年4月号内海名譽主宰佳句

御降りや赤蝦夷松の香の仄か
自然を見る確かな眼をもつ廣司さん。

巻頭句は以下の四句です。

溪流の淵遡る秋の蝶
薄紅葉サロベツに雨煙りをり
○牛百頭売りし牧場や鰯雲

賢治忌や銀泥の木に風強き
仕事から解放され今はスポーツジムに通い、自転車、スキーにピアノ、またボランティア、料理に挑戦など忙しい老後を目指して居ます。今後を期待致します。

（松原智津子）

万象作品



江見悦子・内海良太 共選

○は佳句に選ばれました。

地方紙に包まれ届く新牛蒡 東京 一由久美子

○ 蘭の香や客間に父の花鉢

蔵出しの皿の温もりちちる鳴く

波音の遠くなりけり昼の虫

○ 星月夜さらさら落つる砂時計 福岡 宮田千恵子

満したる盃に満月ゆれてをり

札をしてひとりの稽古虫の夜

花すすき近づくほどに高くなり

畝立つる土の匂ひや大根蒔く 茅ヶ崎 久保田富士子

○ 戸袋に張り付くばつた子を背負ひ

園児らの甲高き声赤まんま

星月夜影翻る屋根の猫

○ 月光やサーカス小屋の鎮れる 札幌 谷 廣司

敬老日プリンひとつと野の花と

朝刊に微かな湿り秋深し

秋深き枝幸の海はあを三色

亡き夫へ白ワイン注ぐ白露の夜 横浜 星野信子

○ 新秋やギターの弦を張り替ふる

白秋やはんなり開くハーブティー

主無き長き土堀や花すすき

ゲリラ雨土間に転る姫南瓜 ベルシ 森尾 舞

茶屋街をそぞろに歩く鏡花の忌

讃美歌のアルトの響き秋澄めり

○ささくれに沁むる糠床冬近し

身に入むや母の手縫ひの躰糸 東京 安藤美酒々

秋晴や園を賑す万国旗

○「天国と地獄」にのつて運動会

牛膝胸に勲章ごっこかな いのこづち

秋麗両手を広げ深呼吸吸 札幌 石田 睦

秋の風豊平河畔ひた走る

秋扇まだ手放せぬ昼下り

地平線くつきり見ゆる蝦夷秋天 佐々木 茂

奥蝦夷も残暑きびしき白露かな

秋天へ声晴やかに地鎮祭

うたた寝に添ひ寝する猫秋涼し 島崎 洋

そろばんの玉弾く音涼新た

○らふそくを家族で囲む野分中

雲一つ置かぬ大空渡り鳥 園田 鶴子

雨上がり朝日を弾く式部の実

冬用意ささら電車の試運転

きつつきや校舎の裏の林から 札幌 竹重富子

枯葉踏む自転車の子の音かすか

脚に枯葉からまる犬の散歩かな

エプロンに賜はる茗荷青森産 田邊 政代

○吾亦紅の自由奔放はぐれ雲

怪人に扮してタクト振る良夜

転んでも笑顔で走る運動会 船橋 明美

肩すばめ歩く先には落葉道

秋の夕家路の灯つぎつぎと

もつれ合ひ宙に吸はるる秋の蝶 八代 洋子

わびさびの句を作る夢九月尽

行き行きて芒のふゆる墓の道

野に黙す石の仏や虫しぐれ 和島 良一

秋の灯の三三五五と点りけり

乾びたる普請の音や天高く

神棚に供へし新米頂けり 新庄 曾野部礼子

○稜線の向う側から秋の音

雨上がり尚あををと葛かづら

切株に忘れ団扇や袖仕舞 仙台 富田 洋子

○秋萩帖の臨書終へたる良夜かな

塗りたての百葉箱に色鳥来

○揺れ揺るる紙垂に秋蝶まとはりぬ 新潟 齊藤 信

結ばれしみくじ湿りて秋曇

地蔵会や板碑の文字の消えてゐし

秋の蝶上へ下へとめぐり去る

斎藤ヨシ

欄干の石の肌なで秋思かな

行く秋や流線美しき柳都橋

佐藤幸示

ドームより歓声の波秋夕焼

本堂に田よりの微風三尺寝

秋の蚊に腕を吸はれしままに入る 燕 渡辺志ま

○弥彦山裾野より晴れ松手入れ

露草やハーブを吊す深庇

竹竿に向きを揃へて赤とんぼ 芳賀 稲川清子

鶏頭の風に倒され泥まみれ

電球に打ち当りたる鬼やんま

枯蟠螂テレビ画面を這ひ回る 福武幸子

露座仏の膝を濡せる露の朝

大泣きの子をあやす保母秋暑し

まだ草とたたかふ日日や秋半ば 鹿沼 渡辺利子

あちこちに稲刈る音や日曜日

草の花ソーラーパネル越えてをり

古里の行合ひの雲柿日和

庭先へ試歩こはこはと小鳥来る 栃木 飯塚キミ

○ひさびさの指貫ゆるむ秋の夜

遠富士や稽田さやと揺れるたり

秋祭稚児へ綿菓子配りけり 佐野 木村君子

残る虫秀郷ゆかりの城の跡

家中の花瓶に溢れ百日草

齋藤ミチ子

赤とんぼ物干し竿に翹休め

土手一面彼岸花咲く通学路

通学の子の上りたる萩の坂 関口かつ子

黒雲の間に浅間山や秋夕焼

朝の日に猫の擦り寄る青蜜柑

外灯の下に馬追鳴きはじむ 仲山さよ子

漣の水面に映る曼珠沙華

真つ新の神木の幣鷄来る

日当りてひときは白し貴船菊 菟原美穂子

豊の秋バイク列なる芦野宿

○翹たたむ終の秋蝶遊行道

那須野晴れカフエの書架に梅もどき

○ひとしきり遊行柳へ秋の風 佐野 義本美智江

遊行道右に左に蝗跳ぶ

天高し穂波に赤きトラクター

天空を歩くがごとし尾瀬の霧 つは 藤原善明

○お囃子に小若も混り秋高し

虫時雨八分音符の連打かな

○朝顔の瑠璃色の日日いとほしむ 志木 汐見克彦

雨の打つひと日を聞く酔芙蓉

昨夜の雨去りし朝の秋の虹

内向きの心の晴るる鰯雲 森山洋之助

草相撲血の気の多き瘦せ力士

漸くに秋を引き連れ赤とんぼ

校庭の笛高らかに秋来る 和光 板垣陽子

コスモスの揺れて石段覆ひけり

鳩も来て運動会の始れり

天高し希望も高く老夫婦 新座 多田英治

秋遍路大窪寺に結願す

○リハビリに手を振るやうに秋桜

バス降りて鈴虫の道帰りたり 所沢 小橋川和子

なびきたるコスモス畑夫見舞ふ

干し竿に夫の病衣や柿日和

ビルの間の出世稲荷や秋ともし 千葉 高田みや子

○源氏の間つるべ落しの花頭窓

見得を切る蕾ばかりの菊人形

搾乳を終へし牛舎へ稲穂風 酒々井 小林あけみ

朝顔の蔓の巻き付く竹箒

○輪に入る前より手振り盆踊

虫の音や土蔵の小窓開け放ち 小林あけみ

錆厚き放置自転車螢草

山栗の車道に弾け雨強し

強張る指なだめ栗剝くまた一つ 佐倉 新谷八郎

手の平の種風に飛び天高し

西瓜あまた恵みし蔓をたぐりけり

人込みやそば屋の前の菊花展 有泉正夫

敬老日名入りの杖を贈らるる

角打ちの長命泉の新走り

秋の田をひとり操るコンバイン 杉田富美代

良夜かなスーパームーンと聞いてなほ

台風の電車不通を置いて去る

○流人墓今は土塊曼珠沙華 鈴木隆久

重陽や入り日に燃ゆる大手門

神木の洞より洩るる秋の声

とんかつ屋の看板傾ぐ残暑かな

佐倉

鈴木美根子

天高し夫の言ふこと聞きながす

吾の影の帽子に止る秋の蝶

毬栗のあちらこちらに遊歩道

満月の雲を抱けり垣根越し

電線に 一列 椋鳥の にぎやかに

若夫婦 レンタル 着物の 秋祭

秋澄むや墨絵の自画像出来上る

湯気あげて 炭 一杯の 衣被

天高しはしやぐ子の声爆ぜにけり

船橋

入河 大

碑に記す 太宰の 植ゑし 夾竹桃

竹春や 高く 明るき 灯明台

妻に添ふ 通院の 日の 残暑かな

かなかなに 暫しの 間合ありにけり

○筋浮ける 牛の 乳房や 秋桜

日の落ちて 稲田潤す 水の音

塩田の 跡や 桜の 実の 降れる

○徳利にあぢさゐを挿す 傘雨の忌

近藤澄子

槐島 修

仲麻呂も見しか今宵のこの月を

船橋

山口秀吉

上京は二十の時や竹の花

十月の富士山太陽を呑み込めり

荒れし手の母の温みや秋茄子

柏

鹿毛満子

蟪蛄の威嚇する目の伏せてをり

スーパールの夜間清掃夜長かな

夕さりの子等はちりぢり百日紅

雨音の秋をつれくる目覚めかな

村田由美子

○研ぎくれし包丁軽き虫の秋

破芭蕉 閲覧室の窓広し

松戸

石川幸子

秋雨の少し明るむ昼餉どき

朝顔の種こぎれいな小篋欲し

○硯洗ふ 風信帖の 臨書かな

菊岡緋路

裾濡す 朝の 光に 草の 露

引売りの 声やはらく 新豆腐

新調の 老眼鏡や 秋灯下

寿多映子

検診を終ふ 酔芙蓉 薄紅

暮れ残る 空の 青さや 花野道

竹伐りて 青天映す 潦

中森ひろえ

散り際の「お先に」の声秋彼岸

風ふうと雲ふきはらふ月夜かな

○稲架解くやぬつと筑波嶺現るる

松戸

野田成夫

若冲の鶏の眼の冷まじき

関越ゆる勿来の里の菊日和

逝く夏の浜辺に拾ふうつせ貝

ひと刷毛の白き浮雲秋に入る

枕辺に中也の詩集夜長かな

空高し丘また丘の草ロール

市川

奥澤よし江

大陸の気団一氣に秋澄めり

秋気澄む空の深さにジェット音

共同湯の洗ひ場の窓うすもみぢ

東京

石山風童

横走る稲妻鴉群れとべり

秋深し森くぐる度さびしくて

盆踊をどれぬ妻のくすり箱

猛暑かな肩で息して水を飲む

金^{きん}さんの国の花なり木槿咲く

群れとんで千疊岩に赤蜻蛉

万の人河原に集ひ芋煮会

暮れなづむ畑にあかあか唐辛子

秋彼岸鴉くちばしカタカタす

北口富栄

大場八朗

齊藤孝夫

今年酒ぐいのみののの浮き上り

○子別れの鴉幾度も首を振り

表札の住む人未だ秋夕焼

締め直すエプロンの紐秋刀魚焼く

残菊のはみ出せる道空き屋敷

秋雲や低空を飛ぶ羽田行き

新米の届きし夕べにぎり飯

藪枯らしとつてもとつてもはびこりぬ

チエロの音の柞紅葉のいづくより

林檎盛る彼のセザンヌの絵のごとく

野の風に踊るがごとく猫じやらし

○干し竿にからむ柄物秋日和

仕舞湯に目つむりをれば虫の声

キャンパスの香る一画稲の花

○両国を守る古老や町御輿

甥つ子の急な訃報や夜半の秋

秋場所を歩きスマホの力士かな

秋の夜や鳴つて振子の大時計

虫の音のはたと止みたる闇深し

仰ぎ見る日蓮像や鰯雲

東京

高野翠子

鶴田智美

中澤桃子

長谷川信也

長谷川はるみ

馬場美智子

○秋灯やビオラ奏者の靴の艶 東京 平子甲奈

チエンバロの祈りの音や秋の風

新涼やラジオに学ぶ仏蘭西語

慰霊碑に祈る園児や夏の空 前川 昇

広島の語部の顔汗にじむ

潮引いて鳥居に触るる夏の夕

酔客を誘ふ小路夕化粧 松井宣夫

○廃線のバラスト覆ふ明治草

廃屋の軒を垂れたる糸瓜かな

松本幸男

○六文銭なびく土塁や萩の花

銀鱗の万の命や鰯焼く

鈴虫や独眼の父耳澄す

宮崎正義

独生独死てふ教へあり秋彼岸

蕭条と夜明けの光曼珠沙華

残照にいよいよ赤し緋衣草 荒井 仁

新涼やピアノの上の銀の鍵 調布

秋晴や鏡に揺るる髪飾り

香水の中より粗き言葉受く 三鷹 南場雅子

虫の声藪の蔭より細々と

秋来ぬと風の入り来る窓辺かな

○湿り香の山路にきこの栗駒山 府中 竹村晃子

やうやくに厨賑ふ黒ぶだう

秋きざす赤き実ツンと花水木

ひまはりの枯れを片付け庭仕舞 岡分寺 中ノあさ子

地上の葉ばかり勢ひ諸細る

窓開けて今宵の月を楽しめり

静けさや椎の実屋根を走る音 日野 松原悦子

秋涼や畳目に添ふ箒かな

登校の先へ先へとばつたかな

青柿の火傷しさうな道に落つ 青梅 横井一美

虫喰ひの野菜も入れて夏料理

朝涼や仙人掌に風の来て

鈴虫に窓明けしまま仕舞風呂 横浜 大駒泰子

新蕎麦や代はる代はるに赤子抱き

妹は棺に手紙を白菊を

花終へて地におひねりの芙蓉かな 岡 元枝

緑濃き葉蔭に一つ椿の実

彩雲を見たる夕暮赤とんぼ

○黒富士の爽やかに立つ朝雲に 加藤和子

白萩をかき分け猫は十五年
風去りて高き低きに赤とんぼ

秋暑し樽酒軒に蔵の街

横浜

坂本具子

瀬の音に虫の音繁し巾着田
黒雲の野面をおほひ秋の雷

○雨止んで雀が草に良寛忌

柴田雅春

アスファルトを染むる花びら花柵榴

猫の道しだるる未央柳かな

図書館の庭に木椅子やこぼれ萩

文具屋に古き砂消し秋うらら

ひき寄するラジオ夜長の枕辺に

庭にゐて朝の挨拶木槿越し

あさばらけ校舎揺るがす蟬時雨

夕闇に門過ぎゆくや踊笠

黄色の実犬一呑みに山帽子

飛び来る鍬形虫間に戻しけり

四〇〇トンに余る処理水夏の海

蔓ばかり伸びし花壇や九月尽

川崎

横山ユキ子

秋うらら露地の散歩の杖かるし

冷やかや眼薬一滴落したる

栗をむく指に力の白き跡

伊勢原

山本カツ子

草ゆれてちちろの声の切れ切れに

松田

古谷悠紀子

夕月や光止むる瓦屋根

松田

古谷悠紀子

新涼や熱きコーヒー所望され

松田

古谷悠紀子

真上より見下ろす琵琶湖秋ともし

松田

古谷悠紀子

権現山越えて音のみ遠花火

松本

藤森利子

寄り添うて夫と迎ふる祭舟

松本

藤森利子

夫と二人一日炬燵で決算書

松本

藤森利子

久久に古里に来て葉掘る

静岡

飯田優子

○掛稻やほつりほつりと雨の来て

静岡

飯田優子

丸四角黒光りするはさ木かな

静岡

飯田優子

秋時雨蔵の崩れへ降りこめり

静岡

飯田優子

肩に來し蠅螂とバス待ちてをり

静岡

飯田優子

農小屋に積まるる稲棒^{ばち}割れて

静岡

飯田優子

彫り深きゴリラの手相秋日和

静岡

飯田優子

秋の日や絵本の文字の浮き上る

静岡

飯田優子

初島のくつきり見ゆる台風過

静岡

飯田優子

空泳ぐ魚の群れかも鱗雲

静岡

飯田優子

牧閉す槍も穂高も見えぬ日に

静岡

飯田優子

朱に染る電車のランプ霧時雨

静岡

飯田優子

○トラックへ牛の尻押す秋の虹

稲架を組む音の散りたる峡の空

静岡

高橋 一夫

鳳仙花の種飛ばし合ふ下校の子
電柱の天辺に葛咲きにけり

○秋の雲猪肝を吊る農具小屋

天高し狢犬足を跳ねゐたる

脱稿に先づ珈琲を菊日和

赤蜻蛉向かつて来ては急上昇

夕暮に出会へり紅き酔芙蓉

在来の胡瓜は種も喰へと婆

決勝のマウンドに舞ふ鬼やんま

床下に蟋蟀の鳴く苦屋かな

露深し逆縁の子を茶毘に付す

川べりの赤唐辛子日に眩し

倒れたる薄匂へり川のふち

菩提子の葉を付けくるり落ちにけり

工事場の音のあひ間を秋の蝶

秋の雨雀集る寺の町

秋の声貝殻耳にあてて聴く

山裾の祠にひとつ木の実落つ

○秋思かな遠く見つむる駝鳥の目

土を食ふ妻亡き象や律の風

秋うららヒト科の檻に人のゐて

静岡

矢野喜久江

朝日さす床の間に活け白木槿

秋の雨待合室のオルゴール

○海風に夕日まみれの青蜜柑

焼津

小梁洋子

ふしくれの掌かざす秋夕焼

走り蕎麦一番乗りの客となり

鴟の声山肌に添ひ降り来る

掛川

鈴木美由紀

落鮎の葦の葉蔭に留れり

去ぬ燕軒より仰ぐ峡の空

石仏の上目づかひや秋に入る

川島町

鈴木裕一

蛸の声の重る谷深し

干されたるシャツに大きな秋の蝶

灯火親し机に熱き缶コーヒー

金沢

北野陽子

芒揺れ身体も揺るる夕の風

色淡きケーキの中に葡萄かな

亡き母の指輪馴染みて栗おこは

赤とんぼ金色に草銀色に

新出祐子

松永博子

○ばしと音塩辛蜻蛉小競り合ひ

潮風にのり洞窟へ秋の蝶 金沢 田上ナツ子

大根蒔く畝にほど良き俄雨

秋暑し猫の目光る勝手口

月光の届く二間を独り占め

見舞ひたる術後の母の爽やかに

未枯れし紫陽花一花壺にさす

松田好子

爽籟や亀の口から長命水

健診を終へ仲秋の月優し

夕暮のレースカーテンめく秋雨

熱ひいて朝の運転さはやかに

宮崎恵美

梨つつみ見舞がてらの句会かな

声明のひびく城址秋気澄む

白山 朝倉みゆき

晴れ晴れと膳囲む顔敬老日

警官の猪に注意とパトロール

秋手入れ若き庭師のしやしやきと

鶴尾正江

○稔りたる棚田の風の金色に

釣船草揺らせる風や谷深き

○地を蹴つて山車引く子らの昂れり

敦賀 川口和代

祇王寺の茅葺きの門露の秋

秋風や青きドナウへ旅ごころ

子にゆづる姑の秋の袷かな

敦賀 為永香月枝

百体の苔むす地藏露ひかる

秋暑し白磁の皿に銀の匙

蹲踞に白雲一つ水の秋

山本一枝

松陰の文机小さし萩こぼる

捨案山子星と語りて眠りをり

ゆつくりと水車の廻る残暑かな

徳島 林 早苗

川瀬の夢かうつつか昼寢覚

山道の蔓かき分けて滝涼し

葛餅に透けて見えたる小豆かな

山本晴美

狭庭にも雀飛び交ふ今朝の秋

秋涼やバスに喪服の老夫婦

旅艸置けば俄かに虫時雨

山本瑤子

城山の本丸跡に昼ちちろ

露草の覆ひ尽せり留守の庭

スッポンの化石出土す里は秋

小松島 田上幸子

朝霧の瀬戸の島島湖底めく

西空に昨夜の名月閑かなる

まつ白な曼珠沙華立つプランター

福岡 相本和子

秋めくや大木までの筈跡
辻に来て自転車とむる秋日和
旅支度初冠雪の日となりぬ
秋暮るる無人駅舎の伝言板
免許証の父の写真や敬老日
雨上がり少し膨れて秋の川
遊歩道の長き亀裂や秋の声
ダム越えて友と昼餉の新豆腐
博多座に大幟たち秋澄めり
○「暫」の幕間に食ぶる栗おこは
乳色の徳利に挿す吾亦紅

那珂川

高山ひさ子

福岡

園田清子

鶴田輝代



毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊

俳句界

2024年

1

月号

特集

一生俳人

生涯追い求めたもの

○俳人たちが追い求めたもの

佐藤鬼房…渡辺誠一郎 鈴木六林男…
次井義泰 金子兜太…堀之内長一 森

澄雄…上野一孝 和悟朗…久保純夫
鍵和田柚子…依田善朗 岡田日郎…鈴

木久美子 岡本眸…松岡隆子 澤好摩
…山田耕司

○私が追い求めるもの

池田澄子 高野ムツオ 坪内稔典
横澤放川 鳥居真里子 岩田奎

タラシ 俳句界NOW 星野高士

特集 俳句で時代を記録せよ

大正から令和まで、時代をうつすキー
ワードと俳句

大関靖博 大石雄鬼 成田一子 高勢祥子
若林哲哉 中山奈々 細村星一郎

投稿欄選者新春競詠

*セクション結社 「青麗」 高田正子

私の一冊 橋本石火「ハンザキ」

対談

佐高信の甘口でコンニチハ！
鳩山由紀夫（政治家）

「俳句界」投稿欄

一流選者13名！
日本一充実の投稿欄

*一部変更の可能性があります。



株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

万象作品の佳句

内海良太

蘭の香や客間に父の花鉢 東京 一由久美子

「風」歳時記の見出しの「蘭」の傍題に「蘭の香」があり、
「香気高い蘭の花には種類が多い。春、夏の開花が多いが、
気品高い秋蘭は四君子の一つ。古来、藤袴を蘭と呼んだこと
もあって、蘭一般を秋とする」とある。

扱いにくい季語だが、この句の場合一般的な蘭の花とみて
いいだろう。午後からの来客を、蘭の花でもてなそうとして
いる父である。仕事途中の花鉢だろうか。

星月夜さらさら落つる砂時計 福岡 宮田千恵子

星月夜は満天の星が、月のように明るく地上を照らす様子
を言う。どこに置いた砂時計だろう、砂時計の砂がさらさら
と落ちる。星月夜の星が降るとすればこれもさらさらという
感じだろう。取合せの句。

戸袋に張り付くばつた子を背負ひ 茅ヶ崎 久保田富士子

野原で見掛ける蝗虫だが、こんなところの戸袋にというの
が意外性、それも子を背負つて、というのが第二の発見。

戸袋はさておき、この蝗虫は「オンパバッタ」。交尾のた
めにメスの上にオスが乗っている姿がおんぶしているように
見えるもの。句会でオンパバッタの句をよく見掛ける。

月光やサーカス小屋の鎮れる 札幌 谷 廣司

小屋掛けのサーカスとは懐かしい。にぎやかに公演してい
た小屋も終演後の時間が経つにつれて寂しさがやってくる。
小屋裏からの小動物の鳴き声、これも物寂しい。月の光に
サーカス小屋はますます鎮もりを深めていく。

新秋やギターを張り替ふる 横浜 星野信子

新涼の頃ギターを張り替ふるには、先ずは弦を張り替えてからと
いうことだろうか。弦が古びると音に伸びがなかったり、本来の
音が出ないのは容易に想像が付く。テニスのガットと同じで、い
い音質を求めるためには、いいケアが必要。

ささくれに沁むる糠床冬近し ベルン 森尾 舞

指のささくれは触れるだけでも痛い。酢漬の本場ドイツに
いても森尾さんは日本の味を求めて、糠床を拵えているのだ
ろう。糠床は日に一回は掻き回さなければいけないと聞く。

ささくれの手には厄介なことだが、冬が近づく頃はぬか漬
が一段とおいしくなる。

「天国と地獄」につて運動会 東京 安藤美酒々

明るくて楽しい句だ。メインイベントのクラス対抗リレー
は必ずこの「天国と地獄」の曲だった。スターターのピスト
ルが鳴り大歓声の中を代表選手がトラックを疾走する。私は
いつも応援組だったが、この運動会の曲には心が躍った。

これより三句入選からの佳句

吾亦紅の自由奔放はぐれ雲 札幌 田邊政代

吾亦紅の花のつけようは秩序があるような無いような、捉

えどころが無い。自由奔放に見えるはぐれ雲との取合せ。

吾亦紅ばつんぽつんときままなる 綾子

秋萩帖の臨書終へたる良夜かな 仙台 富田 洋子

硯洗ふ風信帖の臨書かな 松戸 菊岡 緋路

阿句とも臨書を終えた場面をいつている。「秋萩帖」は小

野道風筆の和歌48首を書いたもの、「風信帖」は空海筆の最澄宛て書簡。書道史上の名品と「広辞苑」にある。

色々なことが想像できて楽しい句だが、何か達成感と墨の香のようなものも感じられる。

弥彦山裾野より晴れ松手入れ 燕 渡辺 志ま

新潟県の弥彦山、裾野よりだんだん晴れ上がつてきた。澄んだ秋空の下での「松手入れ」は気持ちがいい。読者にはつきり景色が見える句はいい。

ひさびさの指貫ゆるむ秋の夜 栃木 飯塚 キミ

衣食が足りてこの頃は針を持つ機会も少なくなってきた。久々に針箱から取り出して指貫を嵌めてみたところ、以前とは違う嵌め心地。実感のある句。

翹たたむ終の秋蝶遊行道 佐野 穂原美穂子

ひとしきり遊行柳へ秋の風 佐野 義本美智江

阿句とも、芦野の遊行柳での囑目。この秋お二人で芭蕉の遊行柳の里を吟行された。秋風の中の蝶の静かな姿に芦野の景が想像できる。秋でも青々とした遊行柳だが、芭蕉の田植え頃の遊行柳周辺の風景とは違い、景色にやや物足らなさを感じたことだろう。

遊行柳の根元に蕪村の句碑がある（柳散清水涸石処々）。

源氏の間つるべ落しの花頭窓 千葉 高田みや子
膳所の義仲寺や瀬田の唐橋を巡り石山寺に着いたときはもう日暮に近かった。源氏の間案内板を見るのも釣瓶落しの最中だった。灯の点り始めた花頭窓が眼に浮かぶ。

輪に入る前より手振り盆踊 酒々井 小林あけみ
盆踊りでよく見掛ける光景。輪の外にいても、もう身体は踊っている。スツと踊りの輪に溶け込んで何気なく踊っているスマートな姿に感心する。一瞬の動きを捉えた句。

両国を守る古老や町御輿 東京 長谷川はるみ
この両国は東京都墨田区の両国橋の東西両畔の地名。隅田川が古くは武蔵、下総両国の国界であったための名称。

両国は大相撲の国技館で知られるが、この地のきつぷの古い古老の皆さんが伝統の町御輿の風情を守っている。

廃線のバラスト覆ふ明治草 東京 松井 宣夫

明治草は鉄道草と同じ。明治初年に渡来した外来種で、道路や鉄道に沿って広がったとある。廃線の線路石に明治草がびっしり生い茂る荒廃した図だが、何故か明るさがある。

ばしと音塩辛蜻蛉小競り合ひ 金沢 新出 祐子

蜻蛉がもつれ合いながら急上昇や急降下を繰り返す。その度に羽が触れ合って乾いた音がする。思いもしなかった蜻蛉の翅音に驚いたのだろう。

日盛りに蝶のふれ合ふ音すなり 松瀬 青々

新中央句会報 (10月例会)

令和5年10月22日(日) 東京文化会館

(出席21名)

江見 悦子 主宰選

落鮎のちひさな息を掌に	内海良太
どびろくの一句を記す箸袋	中村千久
山下るリュックに揺るる烏瓜	南雲秀子
踏み締むる靴の底より秋の音	久留島規子
金色の緑の小鉢の菊贈	内海保子
桐の実のワインレッドの色深む	塗木翠雲
秋惜しむ楷書のごとき人なりき	中村千久
野馬土手をどんぐり蹴って走りけり	赤堀洋子
一歳の神馬はポニー菊日和	村田由美子
母かけし襪糸切る夜長かな	安藤美酒々
昂といふ星また増えし天の川	藤原善明
施餓鬼会の山と積まれし弁当箱	安藤美酒々
一畳の揮毫の飛沫秋澄めり	大久保進

① 一畳の揮毫の飛沫秋澄めり 大久保進
「一畳の揮毫」と言ったら、ちょうど襖の大きさに筆を揮

っていることになるか。寺の書院に収められる書作品を揮毫しているのかもしれない。容器に入った墨液に大筆を浸し、気合もろとも筆を走らせる。辺りには飛沫が散り、書家の素足も墨にまみれている。秋の空気が澄み渡り、墨の香が漂っている。勢いのある一瞬間を詠んだ句。

踏み締むる靴の底より秋の音 久留島規子

季語「秋の音」とは、「秋と実感させられる音の気配、澄んだ空気の中に繊細になった感覚が捉えた秋の気配をいう」と歳時記にある。作者は、今までの夏のサンダルとは異なった靴で地を踏みしめた時に「秋の音」を感じたのだろう。爽やかな実感に溢れた句だ。

昂といふ星また増えし天の川 藤原善明

シンガーソングライターの谷村新司氏が亡くなった。彼の飛ばした数々のヒット曲の中に「昂」がある。「我は行くさ」らば昂」で終わるこの曲は、60万枚の大ヒット曲となった。「昂」とは「プレアデス星団」の和名、その星が天の川の一つの星になったと詠んだ。谷村新司氏に捧げる心の籠った句である。

内海 良太 名誉主宰選

銀河へとさらば昂よ谷村よ 松浦陵保
息かろき人に抜かれぬ爽やかや 田中道江

聖橋へのぼる階段ちちろ鳴く 村田由美子

ちぬを釣る白き巨船へ竿振りて 柳澤宗正

金色の縁の小鉢の菊膾 内海保子

秋澄むや木挽の楔打つ響き 下嶽孝一

秋借しむ楷書のごとき人なりき 中村千久

鴉来るオリブの実のぶだう色 江見悦子

白杖の打つ石だたみ秋の寺 星野信子

一歳の神馬はポニー菊日和 村田由美子

足裏の痛くなるまで秋麗 小池清晴

施餓鬼会の山と積まれし弁当箱 安藤美酒々

④ 笠の列下山の僧に初しぐれ 下嶽孝一

⑤ 笠の列下山の僧に初しぐれ 下嶽孝一

修行を終えた僧が寺を出る場面、何人かの僧侶が列をなして歩いている。白っぽい笠が目立つのは山深いところの寺だからだろう。比叡山延暦寺、福井の永平寺か。初時雨が初時雨らしく最もよく感じられる山だ。季語が動かない。

息かろき人に抜かれぬ爽やかや 田中道江

作者の田中さんは毎日目標の歩数を定めて散歩をしている。目標の歩数に近づいた頃、後ろから「お先に」といって抜いていった人がいる。呼吸も身のこなしも軽やかで爽やかな気分がした。作者の表情が読み取れる句。

聖橋へのぼる階段ちちろ鳴く 村田由美子

お茶の水駅近くの聖橋。神田川の土手には草木が見られるが、いつも工事中でガサガサしている。その無機質な雰囲気の中に虫の声。俳句をやる人なら誰でも注意を向ける。安らいだ気分がしたことだろう。

中村 千久 選

新刊のインクの匂ひ寒露の夜 星野信子

山下るリュックに揺るる烏瓜 南雲秀子

鵬日和洗ひ上げたスニーカー 江見悦子

蘆刈の下見バイクで来てゐたり 内海良太

鴨はやす木洩れ日浴びし孔子像 田中道江

豆腐買ひに金木犀の路地抜けて 南雲秀子

金色の縁の小鉢の菊膾 内海保子

秋澄むや木挽の楔打つ響き 下嶽孝一

無花果の砂糖煮二つ益子皿 内海保子

笠の列下山の僧に初しぐれ 下嶽孝一

一歳の神馬はポニー菊日和 村田由美子

母かけし簾糸切る夜長かな 安藤美酒々

⑥ 読み止しの本はそのまま十三夜 星野信子

⑧読み止しの本はそのまま十三夜 星野信子

中秋の名月からひと月後の「後の月」、その二日前の夜、深まる秋にまだ左側が膨らみ切れないでいるのが「十三夜」の月。作者はそのしみじみとした月を味わい尽くしている。上五中七の措辞から、月に魅入られている作者の思いが伝わって来た。

蘆刈の下見バイクで来てゐたり 内海良太

「蘆刈」とあって、学生時代に一時夢中になった谷崎潤一郎の作品にあったあの不思議な小説を思ったのだが、掲句はそんなことには頓着することもなく俗に倣している。そこに俳諧味を思った。

無花果の砂糖煮二つ 益子皿 内海保子

無花果を甘く煮詰めたコンボートが二つ。お洒落なデザー トが美味しそうだが、作者はそれを民芸調の「益子皿」に乗せてみせた。この辺りのアンバランスがおもしろい。この果物には、皿の見込みに描かれた染め絵のような気分もある。

今後の新中央句会の予定

▽1月28日(日) 東京文化会館 大会議室 13時より

*特選に、江見主宰・内海名誉主宰の色紙を贈呈

▽2月25日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

『俳句と遊ぼう』

中村千久

俳句と遊ぼう
中村千久



新書判/並製/カバー装
ISBN978-4-86737-045-2 C0295
定価: 1,650円
(本体1,500円+税10%)

装丁 南仲坊
帯文 坪内稔典

俳句は頓智、あるいは謎解きを根っこにしています。芭蕉の「古池や」は、古池だなあ、の意味ですが、同時に、古池とはどういうもの? という問いでもあります。その答えが「蛙飛びこむ水の音」です。この本、俳句の根っこそのものを、頓智力を鍛える本です。鍛えながら、好きな俳句を見つける楽しみもあります。私もこの本の俳句クイズに挑みます。

坪内稔典

▼ご注文は下記へ▼



株式会社 文藝の森

福岡本社 ● 〒810-0041 福岡市中央区大名2-6-40-7F

TEL.092-739-8194 FAX.092-739-8190

俳句

1月号 予告

12月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

豪華 新年詠7句

柿本多映 宮坂静生 高野ムツオ
星野椿 大串章 西村和子
矢島渚男 高橋睦郎 正木ゆう子
宇多喜代子 大木あまり 片山由美子
池田澄子 中村和弘 小長谷川
今瀬剛一 寺井谷子 小川輕舟

新年詠 12句

二ノ宮一雄 柴田多鶴子 古賀しづれ
浅井民子 鹿又英一 マブソン青眼

新春座談会

俳句の今とこれから

危機を超えて——コロナとウクライナ以後

別企圖 全国結社マップ vol.4 甲信越・東海

合評鼎談新メンバー……横澤放川・辻村麻乃・拔井諒一

新連載 現代俳句時評……「俳句」と「日常」——小川輕舟の俳風の意義……堀切実

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

座談会

最近の名句集を探る

黒田杏子「八月」

赤野四羽

橋本榮治「瑜伽」

大西朋

山口昭男「磔」

名取里美
司会 筑紫磐井

俳句四季大賞
受賞記念作品40句

星野高士

◆巻頭三句

宇多喜代子

筑紫磐井

高橋睦郎

坂口昌弘

正木ゆう子

忘れ得ぬ俳人と秀句

中村和弘

青木亮人

岩岡中正

俳人の書き
句の手触り、
俳人の書き

能村研三

大西朋

◆今月の華

大石雄鬼

神作研一

渡部有紀子

藤村公洋

◆俳句と短歌の
10代競駄

井越芳子

堀田季何

水原紫苑

諸家音楽
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2024年1月号

12月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

贈送録

小澤 實「去りゆきしひとびとの声」

新連載

俳句の詩語イメージ辞典◎井上泰至

北から南から

めだかの学校

埼玉 三村 紀子

浦和句会は長年会場として利用してきた市民会館うらわが老朽化により解体されたため、対面句会が再開された令和4年6月からは千代田区三番町にある女子大のゼミ室に場所を移しています。こちらは浦和句会の師である故飛高隆夫先生が教鞭をとられた学院であり、現指導者の中村千久さん、幹事の砂地宏子さんをはじめ浦和句会参加者のほとんどが教員或いは生徒として一時期を過ごした馴染み深い場所でもあります。学院の周辺には皇居千鳥ヶ淵や靖国神社があり、緑豊かで句心が刺激されるエリアです。

句会が開かれる日曜の午後、ひっそりとした校内にたずねていると、飛高先生が毎回冒頭に最近の出来事をユーモアを交えてお話しになり、くすくす笑いがおきる中で句会が開始された情景が思い起こされます。現在の浦和句会でも、この句は飛高先生がおとりになりそうだとか、これは飛高先生が好んで詠まれた題材だとかとか何かにつけて飛高先生に思いを馳せております。

浦和句会には童謡『めだかの学校』の歌詞にある「誰が生徒か先生か」の、皆がともに学び合う精神を大切にしています。令和5年10月に浦和句会合同句集の第五集が刊行されたところですが、句集の題名『麦魚』の由来はここにありま

『麦魚』第五集より

又兵衛と呼ばれて桜ふぶきたる 中村千久
用向きは追伸にあり蜷蚪の足 山本右近
春の潮モン・サン・ミシエルの砂州を踏む 砂地宏子
桐咲くや書き込み多き母の辞書 岡本純子
シベリアを何も語らず冷奴 桑原優美子
元旦の筑波遠くに青みけり 石井登女
樅の木の青きかをりやクリスマス 小島和代
鳥々を結ぶ架橋や朝霞 中澤桃子
透き通る命の浮遊水海月 中谷由都
退役の橋の袂の茂りかな 三村紀子
11月16日には小春日の中、飛高先生の四回忌となる墓参をする
ことが出来ました。内海名誉主宰にもお越しいただき、
中村千久さん、砂地宏子さん、中澤桃子さん、岡村純子さん
の五人でお参りをし、墓前にめだかたちの活動等をご報告い
たしました。最後に、内海名誉主宰よりお送りいただきまし
た句より三句をご紹介します。いただきます。

菊の香や墓に煙草の匂ひ無く
隆夫墓所色なき風も色付きて
冬麗の闇あはあはと墓の裏

『飛高隆夫墓所』さいたま市営青山苑墓地5-193

(埼玉高速鉄道「浦和美園駅」より車で10分)

ルビーの小函 (1月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 5 並べて (なべて)
- 9 上 濁世 (じょくせ)
- 9 下 寒柝 (かんとく)
- 11 上 唐子 (からこ)
- 11 下 南溟 (なんめい)
- 14 下 骸 (むくろ)
撓ませて (たわませて)
- 16 上 一盞 (いっさん)
- 17 上 御強 (おこわ)
- 17 下 朱 (あけ)
- 18 下 枳殻邸 (きこくてい)
- 19 上 入間 (いるま) *埼玉県の名
- 19 下 土器 (かわらけ)
- 21 上 狗尾草 (えのころぐさ)
- 21 下 氷頭胎 (ひずなます)
鱸綱 (ともづな)
- 22 上 梢 (うれ)
抽でて (ぬきんでて)
日柄 (ひがら)
- 22 下 台所 (だいどころ)
- 23 下 破蓮 (やれはちす)
- 25 上 背負ひたる (しよいたる)
蘊蓄 (うんちく)
- 25 下 欲る (ほる)
案内 (あない)
- 27 上 黙 (もだ)
根来 (ねごろ) *和歌山県の名
- 27 下 訪ひ (おとない)
- 28 上 転た寝 (うたたね)
- 29 上 奥つ城 (おくつき)
竹樋 (たけひ)

- 29 下 攫ふ (さらう)
蒸籠 (せいろう)
蹲踞 (つくばい)
束子 (たわし)
- 30 上 早生 (わせ)
- 30 下 磯馴松 (そなれまつ)
- 31 上 鈴鹿関 (すずかのせき)
新松子 (しんちぢり)
- 32 下 籬 (たが)
- 33 上 秋微雨 (あきつゆ)
- 34 下 貫入 (かんにゅう)
- 57 上 紙垂 (しで)
- 57 下 間に (あい)
- 鶴 (ひたき)
終の (ついの)
- 59 上 棕鳥 (むく)
- 59 下 小宮 (こばこ)
潦 (にわたずみ)
- 60 上 若冲 (じゃくちゅう)
*江戸期の画家
冷まじき (すさまじき)
勿来 (なこそ) *福島県の名
柞紅葉 (ははそもみじ)
誘ふ (いざなう)
- 63 上 茶毘 (だび)
- 64 上 末枯れし (うらがれし)
昂れり (たかぶれり)
- 64 下 松陰 (しょういん) *吉田松陰
狭庭 (さにわ)
昨夜 (よべ)
- 65 上 暫 (しばらく) *歌舞伎の演目

北 南 西 東

消 息 等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「たかな」10月号に

白絹のごとハンカチの花垂るる 悦子

「風港」11月号に

夏負けてマティスの色を讀へぬし 良太

螢火の波引くやうに夜の闇 悦子

「伊吹嶺」11月号に

一門に師の忌いくつも走馬灯 良太

夏つばめ伊那街道の風切つて 悦子

「初蝶」11月号に

青葉闇書架に古事記と英字本 悦子

「対岸」11月号に

恋螢ふうはり杉の高みまで 悦子

「たかな」10月号「俳書紹介」に、三野

宮照枝氏が江見悦子句集「砂時計」を鑑賞

個性と新しみのある俳句を目指す、とい

う「万象」第四代主宰の、平成25年から令

和4年までの三百句を収載の第二句集。

句ひ立つ緋梅を十歩離れたり

十歩の具体性から、逆に近づいたり離れた

りしながら、梅の花を愛でてゐる様が伝

わってくる。その距離が作者の一番お気に

入りの立ち位置だったのでしょうか。

山並みの裾まで黄土耕せり

立葵日干し煉瓦を積み重ね

モルダウの水面粒立つ大タ立

青ぶだう畑へ開く城の窓

海外吟も数多い。平静な視線で詠まれた

句群はすつと読み手に伝わってくる。(後

略)

「斧」10月号「現代俳句評」に岡野多江子

氏が中村千久編集長の句を鑑賞

吊りやれば風鈴は音ほどこきけり

(「俳句四季」八月号「又兵衛桜」より)

吊られなければ、風鈴が風鈴でなくなっ

てしまう。今まで大事に仕舞われ縮こまっ

ていたのだろう。やつのびのびと風鈴に

なれた喜びの声が聞こえた。風鈴は吊つて

貰うことをずっと待ち望んでいた。少しで

も涼し気な音色で和んでもらいたいと願っ

ていた。「音ほどこきけり」が風鈴の気持ち

を絶妙に導き出している。

新潟句会と河交句会の合同吟行句会、昨年

10月1日に開催、十七名の参加

吟行場所はクロスバルにいがた(当日の

会場)付近、信濃川下流・古町市場等

高点句

秋晴れや傘立てに杖二本あり 齋藤 信

図書館の椅子の固さや秋深む 長谷川幸子

欄干の石肌なぞり秋思かな 齋藤ヨシ

風筋に佇てば爽涼ほしいまま 中塚滋子

藤の実の長短数え切れず垂る 渡辺志ま

秋麗午後は日影の船溜まり 榎原ヨ子

対岸のビルや朝霧残りをり 本間悦子

老蝶のていねいに陽を寄せ集め 山田季聴

俳人協会静岡支部俳句大会、10月30日開催

西山睦氏選

祭馬水飲むまに祓はるる 岩崎武士

鳥帰る風ぐせの松みな富士へ 神田美穂子

浦和句会の合同句集「鯉魚」第五集(令和

3年5月夏)発行

雲切れて白き織月西行忌 山本右近

大門を風と抜けゆく初つばめ 砂地宏子

白椿夕日の中を落ち続く 岡村純子

永き日や名画の小さき耳飾り 桑原優美子

春泥の猫の足跡迷ひなし 三村紀子

のどかさや橋ぐりゆく船の水尾 石井登女

畑の畝句ひ立ちたる穀雨かな 小島和代

沈丁花散りて目立たぬ庭となる 中澤桃子

山門の枝垂桜の空青く 中谷由郁

10月25日、俳人協会千葉県支部秋季吟行会

に東京からも主宰始め4名が参加し、内海

良太名誉主宰の講演を拝聴した。

(報・編集部)

939-0364

射水市南太閤山 13
|
24

万象作品投句係行

84
円切手を
貼ってください

〈通信欄〉

編集後記

▽「新年の御慶目出度く申納め候」と漱石を気取ってはみたものの、世界のあちらこちらで戦禍の絶えぬまま、国内に目を転ずれば政治も経済も混乱状態を抜け出せず、どこが目出度いものかと憎まれ口のひとつふたつも叩きたくありませんが、皆さまと共に新しい年を迎えられたことを、なにはともあれ喜びたいと思います。本年も、俳句を通してしっかりとした眼力を養って参りましょう。

(千久)

▽明けましておめでとうございます。現在の住まいに落ち着いたのは10年ほど前ですが、偶然にも江見主宰とは隣駅のご近所で、以来、俳句との関わりが生活の中で大きな部分を占めるようになりました。微力ながら、主宰を支えできれば幸いです。今年もよろしくお願いいたします。

(規子)

▽2022年後半より、編集部の仕事を担当させていただきました。原稿の執筆にご協力いただきました皆様に

感謝申し上げます。今後は体調の回復に努めていきたいと存じます。(泰山)

▽令和5年「万象」全国俳句大会は、関わった皆様のお力で無事終わりました。お疲れさまでした。久しぶりに多くの方とお会いすることができ、リフレッシュして帰ることができました。

(美穂子)

▽新年明けましておめでとうございます。コロナの4年間を経ての全国大会。皆さまとお会い出来たことは大収穫でした。特に殆ど初対面の各係の皆さまとチームワークよく働いたことは、新しい一歩を歩む仲間の存在を実感できました。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。

(宏子)

▽出雲大社へ行くこうと思立ち、ウエブサイトでサンライズ出雲(寝台車)の予約をしようとしたら、何と予約の前段階として、リクエスト受付なるものが存在していた。後日、可否の返事がもらえるらしいが、返事が来る頃には気持ちが変わっているかもしれない。(清晴)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納しただけです。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象

一月号

第二十二巻 第十号
通巻 第二六二号

令和六年一月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三一-603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

第六回「中山純子記念俳句賞」作品募集

応募資格
作品

「万象」同人に限る。

15句、未発表作品に限る。

四百字詰原稿用紙（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入、

また末尾欄外に住所、氏名を明記し一通（コピー可）を提出のこと。

封筒に「中山純子記念俳句賞応募」と朱書きのこと。

選者

内海良太、江見悦子、小林愛子、福島せいぎ、柳澤宗正

井村和子、曾根 満

締切

令和6年1月31日（水）

注意…応募の宛先が変更になりました

宛先

〒270-0138

流山市おおたかの森東四一九九-三四

沢辺たけし

Eメール応募の場合は次の2名へ同時送信。

judayuu@xd6.so-net.ne.jp 沢辺たけし

makitab2014@gmail.com 成瀬真紀子

メール

郵送